

同廿八日 晴肥田長野出發せり六字より福原に約しアリングトンを招魂場に至る田中戸籍も同伴せり今夕亦暫時雨あり夜杉浦久米福井と散歩漸覺涼

(籠頭) 九十七度

同廿九日 晴當日は洋曆七月四日曾て千七百七十六年今を去る九十六年前獨立の布告をなせし日にて全國當日を以休暇の日となしニューヨルク、ホーストン、ヒヨドルヒヤ等盛に遊觀の趣向を設ると云華盛頓にて人民樂を奏し夜中は花火などの舉あり今日時々雨纒に覺涼六字より九字半まで條約書を調べり今朝セネラル、マヤー來て頃日大統領も歸府し國務卿も明日に歸府する事告けり夜杉浦福原來る又共々に同氏の宿に至る

(籠頭) 名和來る

同三十日 晴今朝福原和勝出立英國へ歸れり六字頃より鹽田パーソンと

ツロングを求めに其一店に至れり

六月朔日 晴六字頃ズイセイニコンシユル 來訪薄暮山口久米

近方を散せり夜又サ、木と散今日留守狀を出せり

同二日 晴終日無事大使マヤー宅を訪へり纒に政府の内情を探りし事

あり杉浦を訪ひ又散歩せり

(籠頭) 日曜

同三日 晴六字頃より杉浦久米渡邊佐々木等と名和を訪ふ○國務卿より

傳信達す彼頃歸府せし筈の處此傳信にては後の月曜日に歸府すると

云○今日始て西瓜を食せり味本邦の西瓜に異なるなし

同四日 晴頃日大使よりマヤーに使節初發よりの情實を内話ありしよし

にて彼も權外の事と雖も窃に情實の不通を患ひ種々苦慮せし折にして

彼の力の及ひし限りは奔走せり余等亦初發よりの主意至今日一貫せざ

るを益疑ふものあり今日大使と談じ大使の託にて余杉浦とマヤー宅に至るマヤー疑ふところの數件を余に尋ぬ余一々其に答ふ彼益了解せりと昨日マヤー之周旋にて大統領へ傳信を通し大統領より國務卿へ傳信を通し其報あり依て相議し大使ウエストポインに今夜八字過より發す鹽田福地スロン隨行マヤーも亦同行せりウエストポインに國務卿の別業あり夜散步す

(龜頭)
彦太より書狀到來

同五日 晴二字後寫眞屋に至り又畫店に至る山尾常より書狀到來六字過山口久米など、車行せり

同六日 晴 今日漸會話書を讀了せり青木周藏書狀到來三字過白雨傾盆頃六日炎熱甚依て尤覺快杉浦カハイサ、木とソルシヤルホームへ車行す
同七日 晴十字頃雨あり七字頃大使始一同歸宿國務卿の都合十分ならざりしよし青木周藏品川彌二郎へ書翰を出す

同八日 晴セコンドリールを讀む

ホールンなるもの尋來ケフロンと同行せし某の兄弟と云○杉浦の託にて田中不二麿へ書狀を出す彦太へも一書を出せり昨日腹瀉にて甚苦む今日漸覺快

同九日 晴十字より杉浦福井サ、木とフハイランドブレースに至る鐵泉を飲み其傍の樹木に小憩しエチコの實を採てこれを食ふ其よりホテルに至る七字頃オームリハウスに歸る杉浦等と同食す今日サンシスコより傳信あり大久保伊藤始彼地に着し月曜日より發途すると云二氏の此地に來る初發より報知と齟齬し一の不都合なるを憂ふ

(龜頭)
日曜

同十日 晴四字後ヲームリハウスに至る
同十一日 晴今朝河北義二郎戸田三郎英國より來着九字大使とアドミラルロヂェルを訪ふロヂェルは昨冬横濱にて面會し此頃歸米せり彼昨

年朝鮮と戦ひ京城近傍の砲臺數所を拔けり歸途ヲームリハウスに至り
河北戸田に面會す使節米國に長留し且國書を再議ある等の事を聞杞憂
に不堪態々こゝに來り微意を陳言せんと欲し彼地を發と云○セネラー
ルハブコロツクより花を贈れり○夜與渡邊佛のテーブルに至る不圖へ
ールと同席せり十字後河北渡邊杉浦福井等と散歩す

同十二日 晴河北來る夕刻河北戸田又來る九字よりライスと近邊車行す
同十三日 晴河北戸田來る渡邊洪基發足せり同氏へ家書を託す六字より
河北等の宿に至る共に市中へ車行し九字歸宿又兩氏尋來夜一字過まで
近傍の樹下に至り話舊

同十四日 晴杉猿村杉山耕太の書翰歐洲を経て相達す杉二月廿七日杉山
正月廿一日付の書翰也中議官西岡逾明の書翰一同相達彼は當時佛國に
在留なり三字過より河北等の宅に至り談話夜與戸田散歩す

同十五日 晴十二字外務省におゐて國務卿フヒシと談判大久保伊藤歸

朝後の報屢齟齬せし處を以自ら判然せざるものあり依て兩氏着後を約
し辭去六字頃より河北等の處に至り又市中に車行せり山本重助尋來る
同十六日 晴中島作富田鐵へ書狀を出す杉浦に至り福井杉山の病氣を訪
ふ八字にマヤー を招き同食せり

(籠頭)
日曜

同十七日 晴六字大久保伊藤到着長岡與右衛門鈴木金藏等も隨來せり兩
氏歸 朝後事情困迫の次第其蔓結今日の處に至りし所以を談し互に其
得失を論し後患の國家に及ぶを防がんと欲し衆議を盡すと雖も別に高
論もなく終に最前一兩度陳述せし次第を以我政府歐洲におゐて或一地
に合會し條約を談議するを欲し區々に議するを不欲依て合衆國より歐
洲へ其人を不出已上は條約の當國におゐて不結に決し國務卿斷然相撓
に及ばんと欲す依て三字大使山口余と外務省に至り國務卿フヒシユに
面會し其主意を陳述せり大輔へール通辯ライス在席國務卿甚失望の様

子にて兩三話にして余等百餘日苦心せしことも二氏態々歸朝種々盡議論五千里の海上三千里の山陸を往來せしことも皆水泡に屬せり故に爲國に事を處する其始謹慎沈黙思慮を盡さずんばあるへからず余等此地に到着し匆卒の際此事に至りし元因實に遺憾に不堪ものあり今日國務卿甚失望の様子なれども從容不失常彼私の情を顧み不堪ものあり百方の敵に對するよりも今日の應接不可言の苦情あり河瀬夫妻山尾夫妻千住河瀬夫妻杉山孝福原恭天野小柏村數山縣狂鳥尾小陸奥宗宍戸三河野龜留守勝三郎政之進みね等の書狀落手せり

(龜頭) 田邊鹽田同行

河北戸田坪井等市中を車行せり

同十八日 晴三四日炎威漸減す刺賀長助杉、三井常二郎等留學として英國に至る大使一同渡來今朝面會せり長三洲杉孫七青甫勝三郎等の書狀を落手せり三洲小卷を贈る昨年來不見此畫點々中覺養心思旅中の

一快事也青木周藏去十月廿日の書翰本邦より達せり五字頃より河北戸

田三井杉刺賀等と招魂場に至り八字過歸宿

(龜頭)

小野鐵心沒死の説あり余鐵心とは戊辰已來の知己にして其交如舊知

聞此傳説不覺慘然

同十九日 晴大使始使節一同ホハイトハウスに至り大統領に面會告別國務兵部二卿マヤー、セクリタリ等在席五字國務卿フヒシユ宅に面會大統領在坐又兵部卿にはアリングトンホテルにて其室に至り告別十二字佛公使來る

同廿日 晴各國公使三十餘家へ爲暇乞尋問せりサムナを訪ひ面會せり

(龜頭) 兵部卿驛遞卿司法卿等當時殘居の面々マヤー、ヘールなどジンネルに

招けり

同廿一日 晴朝大使の室におゐて寺嶋英國の先行せしに付御國書云々爾他英國の都合を論せり十一字頃より寺嶋杉浦佐々木とカピタルに至る

一字頃此内にて食事を認歸途寫真屋に至り三字頃宿に歸る四字過マヤ
ーを訪六字コフノルコツクに至り其より森を訪ふ大使始同食談話十一
字相去 花を贈れり

同廿二日 晴朝久米とカビトル之近傍に至れり十二字過アーリングトン
を發すホルチモール、ウイルミングトン、ビエドルヒヤを過き七字頃ゼー
コツク之宅に至るゴブノルヘンリーコツク、セネラール、マヤー同行せり
ゴブノル、コツクは則ゼーコツク之弟なりゼーコツクは米國第一等の富
豪にして歐洲等にも此店あり華盛頓、ビエドルヒヤ、ニューヨーク、ボース
トン等にも店あり當時太平洋へ貫く一鐵道の開築にかゝり三分の一成
就せりと云居宅美麗豪壯地面の廣さ(以下欠)

同廿三日 晴空氣清淨病氣漸覺快朝廷中を散歩し其より主人一同近傍の
寺に至る晚刻又庭中に遊び夜或は一家吟歌

(龜頭)
日曜

同廿四日 晴九字ゼーコツクの家を去りビエトルヒヤに至るゼーコツク
もステーションまで送り來りコンチネンタル、ホテルに宿す二字食事を
終りゼネラール、マヤーに別る此地の人数十人來訪孤子の學校へ案内せ
り此學校實に壯大にして學生數百人を容る佛人デラーなるもの此地に
住し其始は微々たるものにて終に八百萬餘の貯財をなし臨死遺言して
此學校を建ると云當時此學校建築の入費二百萬金なりと戸口の正面に
此人の遺骸をおさめ其前に此人の石像あり其より此一府の人民用ゆる
所の水源に至る 水の趣向尤高大也此處則パールモントパークにして
此パーク周圍十數里世界第一の廣園と云此中に一の麗屋ありこゝに至
て晩食を饗せり歸途 に至り十字過宿に歸る
(龜頭) マヤーは余等着已後始終懇切に周旋せり二字前マヤーの案内にて當
地の造幣寮を一見せり

同廿五日 晴土人の案内にて九字過より獨立堂に至り下院の長余に一本

を贈る堂中に獨立を布告せし時の机椅子等あり四壁に當時會議人其他の畫像をかけり其より蒸氣車製造所に至る職人二千八百人一週日に九輛の車を製造すると云魯國よりも此所に注文せしよし又一つの金具而已製造する所製鐵器械を製造する所に至り其より其府の囚獄所に至る獄中を一見し二字頃宿に歸り食後近邊のミシユームに至る古斷頭器械の形等あり五字此地を離るニユーブランエーキ、ロエー、エリザヘス、イハ一等を過き九字過ニユーヨルクに至りセントニコラスに泊す
(籠頭)
インデベンデントホール

同廿六日 曇又雨昨夜姪彦太如約來て此宿にあり終夜談話寺嶋伊藤其他も已に當地來着し居れり十字過よりドクトル、ベルス、チヨナサム、スターセス、ウエットモール等案内してアスター、ライブラリー「書庫」ヨングメン、キリシエン、アツソシエ、ホール少年集アツスリラム、ホール、クリブルト、チユルデレン不具の幼是等は皆有志のもの互に金を募て設るものなりバイ

ブル、ハウス、スタロレト凡三十餘の國語を以上木し世界へ賣出せり尤社を結て設くるものにして別に目前の利益を不顧なり

グラントン、セントラール、レポー、ラフ、ホツツン、リバー、エント、ニユーヨルク、セントラール世界に稀なるリパースチユハールト之店スリビラン新聞
ウエストルン、ユニラン、テリカラス第一當府是處よりカープリントへ傳信を
通す不待瞬間使節に返答あり此間千華盛頓も同様直に返答ありツリニ
チ、チヨーチ當府第一の寺と云に至り四字前宿に歸り又五字過より
ホテルに至り伊藤を訪ひ八字頃より伊藤と一同歸宿し相談話する數時
(籠頭)
クリリー新聞也

同廿七日 晴フランクリン之店此店吳服を主として商ハーバース新聞に至り
二字頃歸宿せり此ハーバース之家の向に尤疎略の一家ありて他の美宅
に比するときは實に其醜獨り人々の目に觸る然して此店華盛頓在世の
時第一の比屋なりしと入口に偏し二字過歸宿三字過より伊藤を訪ひ四

字前歸宿五字前宿を發し川船にてボーストンに向ひ新約克を離れし右にプロックリンを見イストリバー川をロングアイランドに傍て下る此間風光難筆西湖も如此歟と想像せしほどなり河口に砲臺あり夜三字頃へ暫時船をとゞめり此船實に美麗にして歐洲にも稀なりと云評判なり

同廿八日 晴四字過

に着す是より上陸して蒸氣車に乗り九字過ボーストンに至る此間四十里と云當地の人ステーションへ迎ひに來り居れり直に又馬車に乗りかへケベルハウスに泊す去月來泊せし宿にして室も亦同室なり十一字過より案内人の誘引にてハニハルホールに至る是は獨立しとき始終爰に會議せし由にて華盛頓始當時有名の石像或は畫像あり此前に野菜果肉等の市場あり此家を通貫し州廳に至り其よりスキト、ミチウミにて又種々の諸物天造を一見しホリタク、ニク、インスタチーションに至り歸途消防の器械を見る失火の合圖に應し消防器械を繋ぐところの馬直に獨り器械の所に至る實に妙と

云べし二字宿に歸り四字當州有名の學者詩人百人餘相會し使節一統へ晩食を饗應大盛會と云へし食後スピーチを述るもの十餘人余も亦應請不得止一言を陳述せり十字後皆散す其より又不意に失火の合圖をなし消防の引受忽器械を運ひて宿前に來り失火消防實地の運動をなせり

同廿九日 雨八字半より蒸氣車にてローレンスに至る行程四十里二十六

七年前は草木の林にして二十年前漸二千程の人民移住し當時は人口三萬二千と云水車にて至大の器械を設け木綿を織れり男女日々此處に容るもの千四五百人より千八百人と云始是を設くる五百萬金の入費にして當時元手となすものは二百萬金と云此製造所中に書籍を貯ふる所ありて些少の金錢を出し職人に貸與すると云此等は可感之一事也其よりに至りカーベツトを織る器械所を見る是亦高大にし男女千四百人の職人を容れ元手二百餘萬金一月の入用五百萬金餘と云此近傍

に木綿を織る器械所あり大略如此カーベット製造所の一株六百兩と云
四十年平均にして九朱と云此製造器械所は當國にて皆第一等と云九字
ボーストンに歸る 吉川長吉郎殿 暇乞に來訪あり去
十二月朔日妹よりの書狀達せり

七月朔日 晴四字よりブルツクスを案内にて同氏の家に至り其より同氏
一族メドホードブルツクス、ミスブルツクスを家に至る兩家皆庭園景色
甚佳九字頃歸宿夜御國狀を認む

セテラール、マヤー今朝華盛頓に歸れり昨夜與彼離杯をなす余等華盛頓
に着已來彼政府の命を受け余等の爲に周旋す始終誠實を以相盡せり

(龜頭)
日曜

同二日 晴八字半後ホゾソン、マールを兩所に至り沓の製を見る此近方
より製出もの一年間に五千萬と云マールにて一日二三萬足を製すと云

此村は二十年前より始て人家を移せしと云此日ホゾソンにて寫眞をな
しマールにて午食を認す當國の村ごとに集會所を設く實に妙なり皆
人民の申合にて設けしものなり今日も食事は此集會にてなせり當村の
人民男女七八十人席に列せり四字過ボーストンに歸り直に又沓店兩三
に至り沓を陳列せしを見る數百種類あり又 の店に至る衣服を
仕立るを見る此器械今日始て見るものなり此主人二十年前は一錢に窮
し今日は二百萬の商賣をなすと云六字宿に歸る

(龜頭)
今晚御國狀を出せり

同三日 天氣靜和十字前出立シライス案内して馬車に誘ひ其より海岸に
至り小蒸氣に乗り本艦え乗移れり大小蒸氣七艘送り來り其人千人に近
し獨立砲臺にて二十一發の祝砲を發し又他の臺場送り來る艦等にて祝
砲を發し艦中にて互に離杯を傾けスピーチを陳べ沖の燈明臺の處に至
り東西に相別る樂を奏し歌を唱へ實に今日の別離甚盛舉なり

本朝の書生の當國に留學せしものも送り來るもの多し名和服部等も送り來る姪彦太も來り服部等と共に歸る

同四日 晴昨日來海上甚穩昨十二字より今晝十二字まで二百三十里進めり經度北四十二度二十八分緯度四十五度四十四分今朝霧深咫尺不辨今日洋中にて三船を見る

同五日 晴十二字經度四十二度四十三分緯度五十九度三十七分船行二百六十七里洋中に一艦を見る

同六日 曇又雨西風滿帆十二字經度四十三度五十一分緯度五十三度二十七分船行二百七十二里

(艦頭) 洋中に一艦を見る

同七日 曇十二字經四十四度八分^西緯度四十七度四十二分船行二百五十八里洋中に一艦を見る

同八日 曇十二字經度四十六度三分^西緯度四十一度四十六分船行二百七十

六里洋中に一艦を見る六日中今日動搖尤多し

(艦頭) 日曜

此日從ボーストン千三百十二里クインスタウン迄千三百十一里

同九日 曇十二字經度四十七度三十分^西緯度三十五度二十四分船行二百七十六里

同十日 曇十二字經度四十七度五十三分緯度二十九度十二分船行二百六十二里北風横に當り動搖甚

同十一日 曇十二字經度五十度十四分緯度二十三度一分船行二百五十五里風東より吹く船風に逆

同十二日 雨十二字經度五十度四十九分緯度十四度三十三分船行二百五十二里終日風亦烈

同十三日 曇四字前アイランドのクインスクウンを港口に至る暫船をとむむ一蒸氣船來りまた水先のものも來て此船に乗り港内に至り一蒸氣

船へ上陸の客を移し其荷物を揚げ五字半此港を發す昨十二字より此港
まで二百六十餘里

(龍頭) 下等の客總てアイランドの人なり男女數十人あり

同十四日 晴天氣尤穩早起甲板上に上る英山を右手に見て一字頃リバボ
ール港より凡三四里の處に至る此間の風光甚佳山水の趣粗我

神州に類似す一小蒸氣船こゝに來る則當國の接待役ゼテラール、アレキ
サンドル、アストン龍動より迎として政府の命を帶ひ來て面接せり林董
三郎吉田大藏少輔大鳥圭助其他十餘人來り迎ふ芳山五郎之助兒正二郎
を誘ひ又船に來る一同小蒸氣に乗換へ四字半リバホールに至る美車を
用意し余等を迎へ ホテルに至る當地の知事 來て面會
して同食す五字過蒸氣車に乗り一字龍動に着しバレース ホテルに泊
すリバホールは當國第一の造船場にて市中も繁榮の様子にて米國とは
景様も甚物さびて見へたり今夜正二郎と同臥す

(龍頭) 王宮に向ひす

同十五日 晴客來如山終日接對蜂須賀華族も來訪細君と當市中に同居の
よし我 朝夫妻歐洲に遊ぶは此人を以始とす南貞助林董など、馬車に
乗り市中を巡視し

(龍頭) 日曜洋曆八月十九日

七月十六日 晴朝與林董市中に至る衣類を注文し襟其外を求む今日も客
來不絶秋月華族も昨日當國へ渡來のよしにて來訪品川彌二郎青木周藏
静間彦助伊藤玄伯等も昨日字國より態々渡來來訪せり
四字外務省に至り外務卿 に面會使節皆同行アレキサンドル、ア
ーストーン誘引せりパークスは已に來て在省互に相摺終り無間辭去五字
頃宿に歸る外務省は新普請にて甚美麗なり七字より外務卿の招にて其
宅に至る食後卿の案内にて博物場に至り諸國有名の懸額を一見し十一
字歸宿

同十七日 晴九字半宿を出ハークスアレキサンドルアーストンを誘引にて
テブライテンに至る此行程五十餘里不圖此處のステーションにてナハ
レラン父子其妻などの車中に在るを見る其より當地奉行の案内
にて博物所に至り又一屋に至る折柄學者先生集會日本東京地圖の講譯
をなせりハークスも檀に上り地圖の大意を講し是日本の近情を陳述せ
り二字過一屋にて食事を認め其後海邊にガラスを張り海魚を容れ人を
して海中の有様を想像せしむ余等未見の趣向なり其より海岸市中を車
行し五字蒸氣車に乗り六字九分歸宿夜青木品川其他十餘來話伊藤玄伯
も亦在坐

(艦頭) 今日大久保不快にてこゝに不至余正二郎を携り

同十八日 晴客來如山三字龍動奉行をハークス同伴せり大使始面會其後
各國ミニストル當國諸長官員へ尋問せり尤今日は余と大使と而已なり
此序に寺島辨務使の宿にも至り七字頃歸宿

同十九日 曇山縣富田其外數書生來訪三條公も來訪ありし默雷連城
寺と別に一人同伴來訪せり默雷御國書狀を持參せり二字頃より南の案
内にて彼のバンクに至り於て爰食事を認め時計店デント金具店フレ
ザ一の馬車店ローリヤンコナーに至り七字頃宿に歸る青木來訪共に舊
を話し不覺時移野村靖も亦來話

(艦頭) 僧徒を歐洲に出すの論余曾て頻に是を盡し且默雷等と相議し本願寺
上人に去冬一書を贈り余渡航の前夜東京へ來着不果同行其後三僧發
本朝終に會于此

同廿日 晴客來不絶吉田大原杉浦の案内にて時計店チャールズにて一箇
を求む價五十七夜品川來話至二字

同廿一日 晴山田顯義從佛來西園寺卿も亦佛より來此他客來如山寺嶋鮫
島等と使節一同留學生一條に付會議せり吉田少輔杉浦書記との案内に
て馬車屋に至る夜アーストンを訪ふ

同廿二日 晴サウスケンヂングトンホテルに至り寺島を訪ひ其より品川青木等の寓に至る山田河北等同行せり于時兩氏不在十二字過旅宿へ歸る青木品川其他客來て滿堂大村松二郎來訪三字より禽獸園に南杉浦の案内にて大久保山口などゝ至り見る七字過歸寓夜青木と話舊又語當時二字過臥床今日正二郎與大作早天より來り二字過に歸る

(巻頭)
日曜

同廿三日 朝雨九字頃より晴三字より龍動を發し十字過ブランドホーラに至る

同廿四日 晴ハークスアレキサントルア、ストンの案内にて當地宿營の兵隊を一見す九レジメント、三ブリガード之兵數也又他營より同數の兵隊來て此地に宿陣せり其前廣原におゐて歩騎砲三兵の運動をなし余等に見せしむセチラール、ボースホルは南部の兵事を管轄せりセチラール、アルフレド、南部の兩部中に一部を管轄せり今日の訓練一壯觀を覺ふ二

字過ホテルに歸る一士官今朝來て余等を迎へ又今余等を送てホテルに來る使節一統彼等と同食す山口アストンと來て在此ホテル食後又ハークス、ア、ストン之案内にて本陣に至るボースホル之野陣にて酒をすゝむ互に一杯を傾くボースホルは曾て支那の戰に其兵を管轄せりと其後日本にも遊歴せしよし尤舊幕府の時にして我邦紛紜長州の幕府と對抗せし時也ボースホルは當年七十歳に近し野陣の間凡三十日なりと云ホースホル余に向て笑て云卿等は此兵十倍を殺さすんばなすべからざるの大改革をなせり然し我日本に遊しときは卿等は日本の謀反人なり然るに卿今日まで首領を全し今日英國にて面會する實に愉快なり云々野陣具兵糧所橋梁傳信活板飛脚其局の實際を一見し其より直にステーションに至りこゝにて諸使節と一同蒸氣車に乗る途中ニューボツシュと云所を通る曾て此邊は王遊獵の地となせし處にして王ウイリヤム、ルヒース誤て臣下の爲に殺されし處なり七字過サーサンプトンを過多く

此處より亞細亞往來の船出入せり九字過ホートマスに着し其より馬車にてサウスシーに至りビーチメンションホテルに宿す
(艦頭) 砲臺

山田に別る

同廿五日 晴朝近邊を車行すホテル之前は海濱にて風色又佳一字よりホートマス海軍所に至りアドミラル、モンデー之招にて中食を認め海軍養兵軍艦に至る其より練化石製造ドック建築、鐵船の製造を見る 艦は鐵
當時新發明にして甲板上に鐵筒一箇あり一箇中へ七百斤の大
砲二挺を備へ已上一艦中に七百斤四挺あり艦名モナキーと云

(艦頭) モンデーの庭中にて桑の大木を見る

外にブレモースチャタン之外海軍場あり

同廿六日 晴軍艦の水夫學校に至る此軍艦シントハンセントと云十四歳より十六歳までのものを入校させしと云此艦中凡六百人あり年々五千人の水夫を諸學校中より出せり又一艦に至る此艦にて大砲の打方をな

せり艦將ボイス又別艦に至る軍艦士官其外の裁判所なり此時二士官を裁判するを見る又他の一艦に至る艦名ビクトリーと云テルソン戦死此艦甲板上テルソン之彈丸を受けし處又死せし處等于今其跡を残せりテ
ルソン之語とてエンゲランド、エクスベクト、エヘリー、メン、ウイル、ゾー、ヒ
ース、リユーチー、文字を識せり又テルソン彈丸を受けし時アイ、ハブ、ドン、
マエー、リユーチー、サンキユー、ゴツド、と云へりと實に英國の忠臣也其よ
り又一の蒸氣にて港外に出五艘の大艦碇泊す其一艦マイノールに至る
三等セテラール、ホンペー午食をすめり其より又ハルキユール艦に
至る此時セテラール艦より十九發の祝砲を發せりハルキユールは皆四百
斤の大砲を砲備へり此外に三箇の砲臺を海中に築けり其一箇に至る厚
さ三尺の鐵壁を石臺の上に周圍し二段に七百斤の大砲五十挺を備へ其
上二十挺の大砲を備ふと云普請皆半なり其下藥室あり中心に堀抜の井
をほり其周圍に士官其他の室あり六字過歸宿

(艦頭) 艦名ギユク、ヲスウルリントン

一箇五十萬ホン

井の深水平なり

同廿七日 曇又雨宿前にて六大隊の調練を見る對敵の形様をなせり其より一砲臺に至る四十挺の大砲を備ふ中六百斤の砲一挺あり一たび宿に歸り一字よりロードセテラル、テンプルトンの宅に至る中食を饗すテンプルトンは此部の兵隊を管轄せり今朝調練場にて面會せり歸途アレキサンドル宅に至り其妻に面會し又其より兵隊の陣屋に至り士官下士官兵卒并に兵卒の妻子の家陣屋中の戲場雜品店等を一見し五字過宿に歸る七字宿を發し龍動に歸る大使東伏見北白川兩宮ア、ストーン同車なり十字過龍動に歸る

(艦頭) コロチルリーグヘー

同廿八日 朝正二郎平原太郎と寫真店に至り歸途甚困夜大久保杉原と蠟

細工場に至る古今の豪傑當國の王族其他有名の人物初代ナホレラン之馬車此馬車に乗り見るに種々趣向あり古姦惡の徒又々古の刑具等陳列せり是は處を異にす十一字前歸宿青木品川島地其外來訪今日も客來不絶

同廿九日 雨野村靖兩三日前より病氣にて甚困めりと三字により彼の寓に至る昨夜來快方に傾けりと云又芳山を訪ふ連城藤本等に面會す又芳山と野村の處に至り山田市一同宿に歸る

昨日ニューヨルクの新聞を聞に其中に朝鮮我日本の使節の一人は才留し一人を放逐し國書を破裂せしと實に彼國の頑暴可惡抑然し朝鮮へ使を出す余の建言する所にして實に戊辰一新の春也當時 朝廷の規模一定の上は遠く西洋の各國とも好親の約あり各國の公使等も親しく天顔を拜するに至る然るときは舊好の國と交を親敷するは不待言なり況朝鮮の如きは近隣の國にして且舊好の國なり故別に一价の使節を遣し一新の旨趣を告げ互に將來往來せんことを望む且遠く西洋とも通商

を盛にするに至ては亞細亞近國も又盛に開けすんは前途の目的も又必
不得十分雖然朝鮮の國情を察するに彼頑にして容易に承諾するを思わ
す去とて今日の機會不可失又前途を慮るに今日端を開き置かざるとき
は又不可得ものありと尤始は懇懃丁寧情實を盡し其主意を陳し然して
彼曲を以我を待ち不禮を加ふるに至ては其用意なかるへからず兵力を
以てすると雖も彼國終不得不開且今日我皇國の形勢を想察するに外
に一事を生ずるときは内地の進歩も大に速なるものあらんと而して其
費の如きは彼國と戦ときは一年或は五十萬一年或は三十萬一年或は七
十萬我便宜に隨ひ費すに足る依て其利害を兵部大輔大村益二郎に議す
益二郎始余の説を怪む細議するに至り彼大に余の説に隨ひ共に密に其
事を謀る然し益二郎不幸にして難に斃る益二郎死に臨み兵部大丞船越
要之助を招き此事の大意を遺言せり余始其事謀る有作(以下八行空)
(籠頭)寓はカンベタウン

同晦日 頃日客來不絶恰東京の家の如し二字寺嶋大辨使來訪今夕使節一

同

國書寫差出一條女帝謁見一條國書の趣意に基き談判云々等の事を議す
五字前より青木品川と南貞助の處に至り其より蜂須賀華族を尋ね暫時
事を談す其より小室を訪ふ不在秋月華族を訪ふ不在一同 ホテルに
至り食事を認め又品川と宿に歸る默雷亦來談

八月朔日 晴客來續々二字過よりアレキサンドル、パークス、ア、ストーン之
案内にて大使始宮殿を見物せり内部の美麗眼を驚せり庭園の景色も亦
甚雅五字前宮外に出大久保肥田福地と近方を車行せり六字過宿に歸る
七字アレキサンドル始三氏と同食す
今夜青木伊藤玄芳山默雷等と談時事不知至三字
正二郎も今日余の室に來る

(籠頭)
今宵雷鳴

同二日 晴又雨又晴今朝青木等の宿に至る品川青木長與等將來の事を約し數ヶ條を談話す桂太郎伊藤玄伯靜間幸助等も同宿なり皆今夜より獨逸に歸る二字より三氏の案内にてハーリメントに至る諸室を盡く一見せりロート、ラフ、パレメント、之書室に至り、共和家連名第一世チャールス王を殺すことを謀るの現物を一見せり歸途ウエストミニストルエビーに至り此議院の向ひに尤古寺なり火災ありて普請一様ならずと雖も修繕して可見の處不少寺中千年前の普請或は八百年或は六百年の處あり此寺中に先王の遺骸其他有功の人の遺骸もまた于此おさめり和尙は、と云其妻は曾て二十年前英國より始て來り、の姉なりと云夜寺島を訪ふ今日正二郎も亦來れり

同三日 晴朝十字馬車屋に至り其よりコランドク、トル之處に至る十二字宿に歸る二字過市中を散歩し五字頃より佐々木司法大輔の宿に至る十

字歸宿

芳山來訪今日佐々木の處にて村田保に逢ふ

(籠頭)
佐々木明日より佛國へ發

同四日 晴十字前正二郎太作來る共に市中を散歩し書林に至り又シヨイント、ナシヨナル、バンクに至る戸田に面會す十二字歸宿二字頃より三氏の案内にて博物館に至り其よりジョンフランクリンの家に至る其妻余等相遇しフランクリンの遺物などを見せしむフランクリンは曾て北極を尋ね終に氷中に死す十四年後彼の遺物を尋ね出すと云宅中に日本の諸物而已を集めし一室あり今日の集會はガーデン、ハーチーと云園中に客を會し食菓飯酒今日來集するもの多くは有名の人と云フランクリンは世界に有名の人なり

(籠頭)
室中

服部一三書狀到來せり

同五日 晴十字出宿蒸氣車にてコードレンシルに至るウインドサーカッ
ソルに入りカツソル中を盡く一見せり外郭樓堂はウリヤムコンケロー
ノルマンより來の所築と云去今八百年其間四五百年或は二百年に増築せ
り王となりし人の所築と云去今八百年其間四五百年或は二百年に増築せ
し所あり古畫珍器武器金銀器等其數を知らず珍器には各國より得る所の名
器あり又チルソンの打れし彈
丸其時打貫かれし木等もあり初代ナホレオン之刀其他不能見盡諸室の美麗驚眼一字過一店にて食事を認其
より庭中を車遊す深山幽谷の趣あり或は數里の池水あり或は曠漠の平
原あり庭中の道を一條となすときは二百餘里と云其廣太可見鹿兎爲群
不知幾處牛豚雞犬を養ふ所あり其數亦甚多し六字過宿に歸る夜バーソ
ンの宿を訪ふ

(籠頭)
二十三里

牛中二博覽會にて第一等

同六日 曇朝客來不絶一字頃秋月華族來訪明日より米國へ渡海のよし芳
山井正二郎太作と同車秋月の宿に至る歸途芳山に至り又野村に至る六

字過宿に歸る正木泰藏と今朝來訪せり

同七日 曇毛利内匠柏村常之丞佛より來る松村淳藏來訪同人今日より米
國へ歸れり秋月と同船なり芳山も亦來訪同氏明後日より百里外の處に
至ると云三字より何佐々木同車して南の處に至り南の案内にてチャー
リンコロースホテルに至る大理國の使節に面會す大理國は則支那邦内
の雲南省にて咸豐六年已二十七年前より獨立し都府を大和と申所に開
き杜文秀と申すものを國主に立ると云杜文秀は元儒者にて德望ありし
と人口は二百六十萬也と云使節は軍機偉略大參軍劉道衡并武職大都督
馬似龍兩人なり未與支那分明に條約を結び獨立せしものにあらず四字
過より六字頃まで談話せり

(籠頭)
九十二番の室に居れり

同八日 晴十字より三氏の案内にてウルヒツチ之大砲製造所に至るウス
ヌトフリヂより蒸氣船に乗りテームスを下る諸橋の廣太可驚ものあり

十一字頃ウルヒツチを彈丸鑄造所を一見す職人七百其盛大いまた米國にて不見ところなり二字前ゼテラール、ウードの處に至り一同食事を認む其より又諸局に至り大砲製造及車臺藥桶小銃彈丸の製造等を見る總て此製造所に入る職人日々八千と云上等四バウント中等二バウント一_等一ハウントの給金と云尤一周間なり支那魯國セハステボル分捕の大砲數挺あり魯砲は敵彈の爲に砲口皆破裂せり支砲は不受彈疵強弱自ら證するに足ると云六字頃宿に歸る○今日默雷字より一書を投せり魯埃の二帝已に都府に至り五萬の兵を以訓練をなし都下の繁雜可想見と
（籠頭）
ウード屢々戰功ありし人と云

當時の大砲盡用銅鐵鍛之

同九日 曇十字より 學校に至る於于此メヤーに面會し同人の誘引にて學校中を一見す當時は生徒二百人餘九歳より十五歳迄は八百人と云校内に水遊の處あり是又米國にて不見ものなり其よりセツポールスに至る此寺

にチルソン、ア、リングトンを死骸を埋葬せりア、リングトンは死後三十日にして此寺に葬ると云其節用ひし車も亦此寺中にあり車の四方は彼の佛より分捕せし大砲を以作ると云此寺は二百年前大火の後直に建しものなりと其より又バンク、ヲフ、エングラントに至る諸局の趣向實に至れりと云べし金銀の斤量等を一見す一斤バウント之金を袋にし斤量
其不數用意せり其繁雜幾數たるを知らず金銀地金を貯ふる所に至る銀は不知其數金は三百萬ミルリヲンありと云其より又メヤー之役宅に至り中食を認め又同氏の案内にて府廳に至り諸局を一見す六字前宿に歸る○井上世外の書狀又中島作太の書狀相達せり

昨日ア、ストーンよりテームス河へ二十歳ばかりの米國の婦人身を投して死せしを聞婦人アイランドに來り居四五斤ポントの金を持ち近頃龍動に至り格別知人もなく終に困迫し其とて身を汚し世に迷ふを厭ふて終にかくなる云々の書置ありしよし西洋の風如此ものは皆狂死となせり如何

となれば教法に自死するを戒めしゆへ狂死にあらざれば葬ること出来すと云へり

(籠頭) △女帝の馬車并御様を一見す大禮の節白馬八を用ゆ次は四次は二已上六車を見る厩乗馬所等をも一見せり乗馬所屋中にて凡そ豎三十間横十間位なり地に木の紛末を敷けり

役宅亦實盡美麗米國のホハイト、ハウモも不及遠し

同日 晴七字より蒸氣にてグレートリーに至る凡八十里于時十字也其よりビクンヒールへ七里あり馬車にて于爰至る三萬五千餘騎兵砲兵殆一萬に近し行軍をなし又縦隊押をなすフリンズ、ヲフ、ウエルズ在此處佛李埃魯兩伊等の士官も皆來視す四字頃皆散す七字グレートリーを發し十字宿に歸る

(籠頭) 入江文郎書狀達せり

同十一日 晴朝伊西班牙尼亞の公使に面會せり舊問屋ホアセス之案内にて

五字半より爰に至る同食するもの凡百餘人其長古の禮服を着す食間大盃にて一席中飲廻し又香水に手拭を濡し顔を拭ふ等未於米國不見ところなりスピーチ有り又奏樂歌を謠ふ十字過歸寓

(籠頭) 入江文郎書狀達す

守寺邦之助來訪

同十二日 晴野村靖之助病氣全快後始て來訪三字頃より散歩しテレンテンストレートに至り七字頃宿に歸り又バーソン之宿に至る今日青木長與書狀達す

(籠頭) 由利來訪同人一連昨日着すると云

吉尾ニユールクより書物を送れり

同十三日 晴朝與伊藤河北一條の事を談す實に難題至極終に論不決二字後吉田少輔來り國債の事件に付評議あり不決バーレンクトンホテルに至る鮫島辨務使と有約同食し數時相談して歸る蜂須賀鍋島兩華族森寺

正木など來訪

山縣少太郎へ英貨五十封度貸與せり同人去年來病氣と云當冬の様子にて歸朝をすゝめ置けり

同十四日 晴六字過岩山由良の案内にて大久保一同メトロホル、タンカトルマーケットに至る牛三千羊二千の數あり尤盛なるときは牛八千羊三萬を出すと云牛は一疋大概二十ポンド宛位と云三字頃より大久保一同外出チアヤリ、ランフ、ストブ等を注文し七字歸宿國司平原佐々木などを誘ひ正二郎と戲場に至る十一字過歸る今晝河北來て苦情を談す

昨日評議一條國債云々を傳信本邦より達する今日外務卿の返答あり
クインセヤター

同十五日 晴正二郎太作の宿に至る二字後嬰兒學校に至る男女三百人に近し四字前宿に歸り又市中に出正二郎の時計を求む夜毛利内匠柏村國司河野など來話

同十六日 曇二字よりタハ、ラフ、ロンドンに至る國王即位其外大禮の節所用の器具冠等を見る冠三つの内其一頂に大シヤマントあり古イスパニヤより得ると云世界第一の大玉なり今一青紅數十の玉を飾る凡其值百萬パウントと云此所は第六エツポルト占殺されし所也又一所に至る此處に先王諸代の其甲冑を着せし像あり甲冑を用るゼームスセコンド則千六百八十八年を終りとす日本の甲冑ありチャールス第二の頃おくりしものと云エリサベツト馬上の像あり不用甲冑金玉を飾りし當世の服と云弩弓其他千年前後の器械三百年前の小銃等あり元込の趣向等却て當時に似ざるものを見るウリヤムコンゲルを建し寺あり去今八百二年と云樓檀より曾て殺されし二王子の遺骸をほり出せしと云又別樓にスナヒドル六萬挺を用意せり其より傳信局に至る男女四百人女子七百人日々入込しよし二年前政府に屬せりと當年の有益凡三十萬パウンドと云書狀を送りし鐵筒又は未見の傳信器械等を見る其より又ホストヲヒ

シに至る毎朝二千人の人或は八百人を以各事務を扱へり後八元より百人
 此局政府に屬し年々の有益凡百四十一萬バウンド位と云七字宿に歸る
 同十七日 晴微寒寺島鮫島等來館留學生徒の一條に付會議せり二字頃より
 キリストルバレスに至るアレキサンドル、ストーン案内せり建築の
 趣向園中の景色又當國の一大場也其中紀元前千七百十九年グリース之
 建物千分一の雛形同二百三十年前ローマ之建物古人厭戦わせし處との雛
云内八萬人を容る
 形等尤可見ものなり此社中の馳走のよしにて樓上におゐて晩食を認め
 七字頃より花火を見物せり今日少年の爲に設けしと云十字前歸宿今朝セルマン青木へ
 傳信を出し今夜返答あり○昨日御用狀達す山尾佐畑書狀到來新聞紙等
 もおくれり山田市も字より書狀を送れり于時昨日の到來に容堂公病氣
 再發終に死去のよしを承知せり當春謬聞を以實に歎惜し後眞聞を得不
 堪大悅然して又此訃聞を得る實に遺恨の至なり

同十八日 曇寒氣俄に冒人朝來客來甚多二字過よりチゼルホルストに至

りパークスを訪ひ其より同人の案内にて宮内卿ロード、シドニー之家に
 至る貴族にて尤富家のよし主人始家内の案内にて庭中を散歩し風光尤佳當國へ來りし已
來政府に屬せしもの、外
 不見又啜茶食菓六字前こゝを去りナポレオン寓居に至る當時ナハレチン
は田舎に至れり
 と盡く客室等を一見せり

(籠頭)
主人 ストロップ

同十九日 曇雨六字より野村寓に至る河北一條の事を談す河北も亦來于
 此十字前歸宿寺嶋鮫島來館大使一同談議三字頃よりア、ストーン之案内
 にて安川と議院に至り又ボリスコートに至る歸路地中の鐵道を乗り宿
 に歸る其より又寺嶋の處に至る不在夜ア、ストーン之招にて同人の寓へ
 安川と至り十字歸宿

(籠頭)
先日已來正二郎來泊今日よりブライトン之學校へ平原太作と至る

正木土方來訪

同廿日 曇池田道藏の宿に至り御國狀を認む昨日來風邪にて甚困む

同廿一日 晴十字より與何佐々木ホリスコトに至る男女三十餘人出于此其より寺島の處に至り數件を談す四字歸宿西郷始參議諸子井上世外留守勝三郎青甫等へ書狀を出す山尾実戸へも同斷伊藤玄伯富田貞二郎より書狀到來正二郎等ブライトン之學校に安着し都合よろしきよし蜂須賀土方來訪夜大久保と長談す奇事多し

(籠頭) 肥田歸龍

同廿二日 雨風邪にて終日家居野村福原土方何野其他來人如山芳山亦從田舎今日歸寓のよしにて來訪寺嶋鮫嶋來話今日ロードメヤーへ案内余爲病辭せり

(籠頭) 高崎西岡等從弟佛來訪

今夜山口急病にて甚苦至曉漸安眠

同廿三日 雨朝土方來り告別野村福原芳山來話河北身上に付云々の論あり依て余等爲舊知保護せんと欲し却て同氏の見未一定を恨ふ田中青木

品川書翰來る長岡鹽田福井矢田作郎來話

同廿四日 曇十二字ハークス與寺嶋余海軍書生の一條を談す由利西岡久米來話西岡佛人フルツクに隨ひ取調へしことの始終を聞服部長岡も亦來訪余不快已來長岡自々來尋

(籠頭) 今朝杉浦の書の持參

同廿五日 曇又雨十字頃よりブリチシアンミジュームに至る先書庫を一見す其大未見ものなりの貯藏あり日本書支那書大概米國にて見るところと同しきと雖もエシフト之古物グリーキ之石刻人物類古物等は又未見もの而已多し二字頃歸宿今夜東伏見宮來月より御歸朝に付御尋あり今夕芳山河北由良なと來る河北一條も漸談終る芳山とも河北一條書生一條平六郎様一條に相談す戸田へ一書を送る

(籠頭) エシフト之石棺等始て見るものにして其時代不可知

同廿六日 晴朝志道貫一來訪十一字過より三條公を訪卿昨年來不快にし

て胸患あり醫師も此地に在留せらるゝことをそると然して卿歸 朝するを欲せず自ら此地に死するを甘し留學せんと欲するの念あり舊臣のもの或は知己の人も是を憂ひ歸 朝のことを余に託せり依て余も亦此言を聞不能安今日其寓に至る然るに不幸にして不在なり故に一書に縷々利害得失終に邦家へ損益の理を分明相論し認め置けり歸途吉田大輔少輔を訪ふたね馬一條の事なり四字歸宿又寺嶋に至る書生一條なり七字歸宿芳山安川久米河北長岡福井等來話會て當府の仕立屋 頼置し大禮服小禮服相調今夜持參せり

同廿七日 晴由利西岡正木内海寺嶋芳山福原由良其他客來不絶三條公御來訪昨日委曲申入置候事御納得にて彌一旦御歸

朝と御決定なり其に付都合も有之森寺へ一書を送りリバポールへ出浮のよふ申越せり野村靖昨日書翰を送れり依て今日返書を出す四字半出宿十字半リバポールに着リムストレートステーション、ノールスウエス

テレンホテル、四十九番の室に泊す

同廿八日 曇又雨十二字より市廳に至るメヤー其外百餘人余等を待遇し互の相摺相終り其より商會へ案内せり兩所の構成甚大なり門前其外人民充滿す二字頃宿に歸る于時於宿前火事の消防器械運動其形情を見せしむ三字過より市中を車行し一のハークに至る趣向甚佳なり其より又セフテンハークに至る四字半歸宿七字より市廳に至る晩食の饗を受くメヤー始同食のもの殆百五十人實に盛宴なりスピーチあり又奏樂彈琴ピアノ十一字過歸宿山口久米今晚到着

(艦頭) 英の政體書を持參するを忘る依て佐々木へ一書を送れり

同廿九日 晴十一字メヤーと案内にてドックに至る水門の閉開を見其より穀物の揚場に至る船中より五層の上の器械を以運送せり米國來如此器械を不見其より砲臺に至り次に蒸氣船米國に至る此船中に中食の用意ありて數十人同食する余等米國より乗船す其より馬車に乗り一

大蒸氣船に至る新造にて此度始てカナタに出船すると云其よりドツクの傍を行きタバコ之納屋に至る其數不可知其樓上に世界の烟葉を陳列す本邦のタバコも其中にあり其第一に居る其より又水夫のホテルに至る水夫等は兎角纒の給金を散財するもの多し依て此ホテルを建ると云 五字半宿に歸る無間與池田近邊を散歩し六字過に歸り八字より戯場へメヤ一の案内にて至る戯場の舞臺がくやを一見す十一字宿に歸る○大鳥今晚ブランド同行ホテルに来る○今日サンフランシスコの新聞に

天皇陛下御歸京の事あり

(艦頭) 規則よろしく餘程世話も届きしと云

同三十日 晴十字半ミシユームに至るの米國已來未見の多し其より川蒸氣船にて二里餘川を下り又上てチエスチャー之造船所に至る大艦六艘其他小船等製造中の有様を一見す此中に鐵製の大艦を中斷して數丈其長さを延せしもタクラト云一船に至る又レポフリツクと云一船に至り是にて食事を認二艘

同ハシヒツクメールスチーマーコンヘニ商社の船にて此商社に其より又川を浜五十五艘ありと云レポフリツクは石炭とも五千五百トンを積と云 其より又川を浜り四艘の學校船に至る内一艘は長官の學校にて多くはセントルメン之子なり又一艘は幼年にして罪あるものを學ばしむ先五年を一期となし厚く教諭して其性質を矯めのもの、金を募り設るものと云商船の士官等は總て此第一船より出るもの多し餘の二艘は幼年に於て改心して勉強するものは袖に其證を着けり故に或は其期に不滿して出るものあり雖然一年より早きものはなし二艘に分つは宗旨を異にする故也一はプロテスタント一はロ歸途ハシヒツク商社に至り六字宿に歸る七字よりマタリパホテル商社の招にて ホテルニ至る同食するもの殆百人統領はハンカラと云人也十一字半歸宿今夜寺嶋へ一書を出す

(艦頭) 今朝印度支那總て東洋の商社連來訪
當時職人三千此造船場英國中尤壯大アラバマなども此處にて造りしと云

九月朔日 今朝森寺邦之助より書狀到來余の盡力によつて三條公歸 朝彌當月の末に御出立相成候に付謝辭云々一報次第爰まで出浮のよし

に付傳信を以報せり十一字頃より裁判所に至る大屋にして中央に數千人を容る、廣堂あり於此處奏音樂鹽湖のモルモン寺にて見し已來の大樂器なり其結構は不及此樂器此堂の前後に兩裁判所あり一はシビルールより四十里なり蒸氣車製造鐵道の條鐵等を製す其廣大米歐に稀なるものと云此製造所に關係する所の鐵道千里なりと云製造所の職人通常のもは大概一ウイキに一パウンドと云此製造所の棟梁は一年に五千パウンドの給料を得と此鐵道に關するもの九萬餘人なりとコンベニーをノースベストロンと云此社中の人にてサーハールメンエヤルの家にて中食を認主人は八十餘歳なり始終製造所へ盡く同行又道中まで送り來る六等の華族なりエヤルヲフマークスと云人も同食中の一人にして是は第三等華族にして上院に出席するの格なり六字過宿に歸る七字よりメヤー其外過日來懇信に預りし面々十四人を招き晩食を饗す食

後メヤー之案内にて馬戲場に至り十字半歸宿森寺より返答あり明日マ
ンチストルに來ると

(籠頭)
朝雨午前より晴

此所の職人而已に一ケ年拂ふ所二十五萬パウンドと云

同日 雨九字半ホテルを出立し直に蒸氣車に乗る十一字前セントペー
レンスに至る此處ガラスの製作所にて餘程盛なり三十年來に七萬人の
人口に至ると云職人男女合て凡三千人女は一周間に給金十六シルリン
グ男子は一周間に一ホンド四シルリングより凡五ホンドまでにして總
合ならして一ポンド半位と云各々働き時限は一周間五十四字一日に割
一日九時間なり然りと雖も平常は十時間總ガラス製造所の諸屋に至り二字前
で働きサチエーデーに十二字前より休と云 ガラス製造所の諸屋に至り二
ホテルへ案内中食を認二字過より發此地マンチストルマ至りクインスホ
テルに泊す室は七十五番也于時五字過メヤースターションへ來り迎ふ
七字より戲場へ案内せり十一字過歸宿

(籠頭)
石、サーダ、炭

カラスを製し初め沙を以磨し二度めを或と石の粉の如きを以磨し第三を鐵のさび粉を以て磨す初るときは鐵を用ひて磨し二度三度は鐵の上へ毛の厚織のものを用ゆ

同三日 晴十字より糸製所に至り其より鑛鐵製造所に至る大砲其他鑛鐵製のものを作る押壓の器械を用ゆ是又始て見しものなり其大なるもの八千トン之押壓器あり曾てフラジユル王英國に來りし時同敷此處來り其後二人の士官を送りしよしにて今日其人等を見る一字歸宿二字より裁判所に至りシビル、クリミナルの兩所を見其より囚獄の處に至る英國第一の裁判所と云四字半頃歸宿七字過より禁酒社中の集會に至る其人凡三千餘一同發聲使節を祝す奏樂謠歌且スピーチを陳ぶ公使ハークス使節にかわり答之其より又メヤー之宅に至る集會數十人立話立食書畫等を見て歸る于時十一字也昨夜森寺邦之助來着今夜三條公

御歸 朝に付云々相談せり臥床の時二字を過○寺嶋河北より書狀到來
ゼルマンより長與書狀も到來せり

同四日 晴六字起て装をととのへ八字よりパーク、アレキサンドル、ア、ストンと同車にてホツクストンに至る行程三十八里ハラスホテルに小憩す此邊風景靜幽藥泉あり遊客常に來りホテル等も甚佳なり十字過より一同寺に至り歸途ハークスを遊歩しミシユーム屋に至るて造れり一字過ホテルにて中食を認め三字頃より前面の山に登り又草を分ち石壁を超へアツクスエジー山に登る五字半ホテルに歸る往來八里餘本朝を出し已來如此未歩行をなさず六字晩食を認む同食のもの満席八字乗車十字

歸宿

(籠頭)
日曜

石灰の石多し製造所あり

同五日 雨九字半禁酒社中二十名來訪使節演說せり十字糸製所織物所に

至る 此處にも糸製所 其より此職人の戯場集會又は講譯講譯聽聞等に設けし處あり至于此此諸製所一社中に職人凡三千人と云十四五歳已下五シユルリングより一パウンド男子は大抵二十五シユルリ職中尤上等のものは十パウンドの給料ありと云皆一ウイキ也尤可感は十四五歳已下のものは五字間職に働き三字間學校に容る、規則也此社中には學校を設けり他の製一字過歸宿二字よりコム製造所に至る隨分盛大にして未見の製造所なり三字半歸宿四字十五分に市廳に至るマンチスタン社中より祝詞を陳し晩食を饗せり同食のもの百六十名又盛宴也七字過より劇場に至る十一字過歸宿田中文部セルマンより書状を送れり芳山森寺福原へ書状を出す

(龜頭) 此社三人の兄弟にて社を結へり其父元職人にて如此〇晝をほるものなり〇仕出せしと云當時生存せり

當府に去年火事二百八十二ありと毎年凡其數にて一昨年と二つの數違ひしと其費現費凡七萬と云他に關係して費るものは五十萬と云消防の用意尤調ひ居應變し其場に至る甚迅速なりと

同六日 晴衣類其他ウツト、エン、ペン、ニかむりもの等當府第一の卸店に至り其よりホリスコ

ートに至る二三の裁判を見聞す又學校ア、エ、ス、チ、ニ、ジり當府の相場所相場所に至る六七千人充滿せり其より又東洋へ輸出を専らとせし店に至る父子結社年二三百萬ホ二字歸宿認食三字タウンホールリ市廳に至る互に演説あり昨夜の食堂に花菓等を陳列す四字歸宿七字商社中ホテルに來り使節一建の爲に饗宴を設けり一字皆散今日條公森寺と一同態々來訪あり二字頃まで談話す

(龜頭) 品物の高二十五萬ポンド

當府の商社中

同七日 雨十字半マンチスタンを出發す知事始ステーションへ送り來る蒸氣車發するに當り發砲せり則鐵道へエレキを設け車の激動によりて發せり祝砲の意マ、と云ウイガン、フレストン、ランカスター古城のカワラエル等を過く此邊の風光未英國におゐて不見なり午後より晴カーステ跡ありルシヨクソンに至り已に六字に至る是より礦鐵鑄解所多し十字前ブラ

ンタヤ、エルスキン、スチユハルド之家に至る三百年來の一華族也家屋の構成甚大

同八日 雨十字半此家を出

より蒸氣車にてグラスコーに至る

此處は英國第三の大府にして人口五十五萬と云ロンドンより二百七十里メヤー等の案内にて木綿織成所に至る器械甚大七百馬力を用ゆると云おもにハンケルチーフを製す一日に其數十三萬なりと第二に鑛鐵の鑄解所を見る第三に相場處に至る數千の人満屋中第四カラスコ、カテートルに至る此寺千百七十五年の造營にて去今殆七百年其構成甚盛なり或は五百年四百年前に造營せし所あり古ローマン宗にして當時はプロテスタントなり第五に食事屋モンキリニムに至る一度の食事 六ペンスト云三階とも客充滿す如此の家府中二三所あり其元は皆一也と第六當府の商會に至るブレシテント、スヒーチを述り第七に一の大屋に至る元額構成しものと云間於此食事を認む同食するもの數十食後七八人スビーチ毎に數十の額あり

を述り四字半こゝを出パークを廻りステーションへ歸り五字半スチハルドの家に歸る○東久世香川高述池田などに昨日車中に面會し今日こゝに來れり宮内連當年に歸 朝の都合なりと宮内の人常に

玉座の傍に從待し今後爲

朝廷に奉公の主意其方向の深からんことを希望し今日の舉止を窺ひ深く歎息し不覺涙下八字食事を認むグラスコー之知事も同食せり昨夜來水師提督セヤ、ゼームス、ホープも來于此家今日も共にグラスコーに至る此人は曾て魯人我對州に來り亂暴せしとき我國にありて力を盡し魯人を退しと舊幕の時にして其子細を雖不知余も同志と深く慨歎し屢建言せしことあり去今實に十餘年なり

此家よりクライド河を望む此河グラスコに達す海をはなる、十餘里なり曾て此河を歩渡せしと其後力を盡此河をほり當時は數十艘の蒸氣日々上下せり又ドンバルトン、カーソルを望めり當國の古城跡なり

(籠頭)
セシモンゴーと云

同九日 晴十字半出此家ビショップストーンより蒸氣車にてクリノックに至る此地人口六萬と云ケヤ社中の造船所を巡見せり職人三千五百造船所におゐては多くは當所第^一とスチエスチャー造船所は太^一抵は修覆の船多しと云一大新造の七八分成就の部に乗り船底其他全船を一見す馬力ノミナル八百と云其レールは五千なりと四千トンの積にて内一千トンは石炭を積と云此處二三十年間に二百三十四の船を製造せりと其より又砂糖の製法所に至る南米の黒砂糖を以白砂糖に製せり其趣向も甚大如此もの當地に十二ヶ所ありと職人或四百或は五百を仕^一役せり此處より又クローックミケヤ宅に至り中食を認む山水の風色甚妙五字辭此六字半過歸

(籠頭)
當時十二艘の鐵艦を製造せり

此船十二萬ホンドなりと云

製法所八層にして高さ百尺

同十日 晴十字半頃より主人の案内にて境内を車行し處々を見物せり麥のコンノ一など蒸氣器械を用ゆ一運動にて穂を取り皮を剥きわらを除けり輕便にして甚妙馬力は一十位と云境内の又一農家に至る百七十スクハエルを預かり四百ホンドの税を出すと云又別一千七ホンドの税を出す農もありと此地の入税一年に二萬ホンドありと河岸に至り渡船へ乗試めり蒸氣にて鐵鎖を傳わり往來せり牛羊豚鶏犬飼所厩其外花園菜園等を一見し本宅に歸り無間中食を共に認め三字半主人始二娘に告別ヒシヨップストーンより蒸氣車にてエーヂンブルフに至る于時六字半なりホテルロヤに宿す室は五十七番なり當地は則當國の古都なり

同十一日 晴東久世香川來話田中長與青木芳山へ書狀を出せり四字より大久保山口と市中を車行し古城の邊に至り市街を一望す此城は八百年前の建築と云其よりアーツルスシツツ山の下を廻り六字頃歸宿天野清

三郎來訪六年前來の事を話す

(釜頭) 日曜

同十二日 晴清三郎歸去プロヘツソル、ア、チャ當時有名の案内にてミジ
 ユームに至り又大學校に至る是は街を隔ミジユムと相接其よりアソル
 シツツ山に登る四方一望せり此處の風色恰似本邦の風景四字頃宿に歸
 るミジユームに至りし前文庫ライブラリーに至る此處は元當國の議院にして千七百
 七年迄は當國の議院はこゝに集會せしものなり其時は元より法律サー、フ
 ートル、スコットと石像あり此人は當國の詩人にして尤有名家なり又千
 四百五十年宇國におゐて始て書籍を上木するを發明す則其時始て上木
 せし書籍を一見す如支那は數千年前より書籍の上木等大に行われ其他
 の形様を相察するに西洋諸國より文明開化の域にありしに今日之形勢
 の如きに至るは盛衰もまた不可圖
 四字過グラニットコンヘニーに至りスチームエンジンレール、ロート、なくして荷物等運送す

車を見るまた一空地にて乗試り馬力十或は十五レール一里西洋の行程六十
 斤の石炭を費し二十トンの荷を運送すると云一字間或は四里或は六里
 を進むと云六字歸宿夜市街を散歩せり月明にして當地の夜景尤妙

(釜頭) 日本物數品あり

古の王廟に至るクイン、メイリーの室に臥床等其儘存在せり額堂あり
 また接して古の寺跡あり只其形を残す八百年餘のものと云クイン十
 一年に一度來ると云當年來て滞留せりと

同十三日 晴十字よりノース、フリチシュ、ロバコンベニーに至るコム細工
 職人千四百十六年前より起せしと云米人にてバートレットと申人と別
 に四人のタイレクタトルあり二周日に一度相會合して談論せしと外に六
 十人のマナーチャあり是は一年に一度會合すると云馬車の輪にコムを
 如鐵輪用ひしを見る響激甚軟にして轆聲なし沓合羽其外種々のものを
 製造せり此處に接し別に一のロバコンベニーあり是は櫛其外女の髮飾

等を専らに製作せり職人六百人兩所とも給金は一シユルリシクニシユ
 ルリンググ年多くは少より五シユルリンググと云分皆一日其よりベニークツク
 のグワハンと申人の處に至る行程八里餘於此家食事を認む此主人は紙製
 な近傍の光色甚佳なり食後主人の案内紙製作所に至る木綿のくすを用
 ひ製種となせり此器械も甚大也千八百十一年ウリンググト佛の降兵五
 千人を一時此製作所容置しと歸途ホイットホルデンにてロツツリンチ
 ヤツブルを一見す古寺千四百四十六年の造營にて去今四百二十六年也
 此傍に古城あり其始八百年前にして其跡あり傍溪流あり碧樹の間に紅
 葉を見る秋色實妙七字歸宿フロベソル、ア、チャ一の案内にてハークス、
 アレキサントル、ア、ストーン等と同食せり

同十四日 雨八字半宿を出海濱より蒸氣船プロヘロス船名三百馬力に乗りベル
 ロツク之燈臺に至る高さ英百十尺下にて其縦横四十尺上にて同十五尺
 エジナルグより四十里なり千八百十一年より建築し五年間を費せし

と云ロベルトスブソンの建築と云世界に有名の燈臺なり、ブレ
 シの建築此燈臺に次て有名なりと是も同名の人建築せりと歸路メー島
 に至るこゝに燈臺あり登て一見せり七十年前一貴族此島を所有し六萬
 ポンドを以政府に買取しと云こゝよりエジナルグへ凡三十里六字よ
 り晩食を認め八字過着岸九字前歸宿今日燈明臺かゝり并當府のロード
 フローブラスとも同行せり

(籠頭)當時一人の給金一日ニシユルリンググ半と云

同十五日 曇十一字 の石炭油製法所に至る然るに此處始終雨な
 り石炭油を製する全石炭より製するにあらず石炭派の上下に一種の灰
 黒色の石あるを取りこれを推きこれより油を製す石を推き釜に入蒸焼しか
 を取る油四種あり尤輕き分は七十度の温度に至ると火の點する甚迅なり第二の輕き分
 は百五十五度にて前のと同じ第三の分は燈明臺に用ゆ上品なり第四の分は器械等に用
 ゆると云最末に残りし又蠟を製せり一周日に二十トンの蠟燭を出すと云
 二字食事を認め二字半蒸氣車にて歸宿せり伊藤大鳥宇都宮林はクラス

コーへ直に至れり

大使杉浦久米福井はパークス、アレキサンドル、ア、ストーン等と今朝八字よりハイランドに至れり

河野光太郎白耳義より書状を送れり

(籠頭) 此石は石炭山と雖も盡くはなし其山によると云

同十六日 曇十字過よりア、チャ之案内にてメルチエントコンベニー學校に至る此學校は皆女也凡千三百人一字毎に皆其室を轉移し學科の異なるものを學ぶ印度其他亞細亞洲中の英領其外に在留せしもの、女兒などもこゝに入校するもの多しと此外に當府に凡如此大なるもの五所ありと云其よりスコツチメンと云新聞紙屋に至るスコツトランドにて大なるものなり此屋の器械も亦餘程精巧にして一ミニュート間に百八十より二百の新聞をすり出すと云又厚き紙を合せ鐵活字にて押壓し再其紙を半圓形の鐵かたに入れ又半圓形の鐵板にてほさみ其間に鉛湯を流

入し半圓形の鉛板となしすり出と云米國公板局の部と大略相似て只紙と出半圓形と只平板と異なり其趣向も亦便なるを覺ふ十二字宿に歸り由良の誘引にて一字よりカラントンより蒸氣船にてブルントアイラントに渡りスコツトの家に至るフリーアカデミーにて吹田兄弟もこゝにて學文せりバンク之キツド、イユルキー其他十五人ほどの英人と余等同食せり余等クイン并海陸軍を祝し同席の諸氏を祝す席を散じ茶菓をとりキツド之婦二女スタニー、ストリート「ミリヤ」スコツト夫婦などヒハナを弾じ又踏舞を催し終又余等も踏舞に誘ひ或は玉を争ひ實に近來の一興也市府と異り田舎の興情修飾すくなくして尤妙キツド之一女ヲリイ
ンタルバンク之 に嫁し當時日本にあり近頃一子を得し報知あり且キツド余の姓字と相似たるを奇とし交情も自ら妙十字過ホルストホテルに至る田中と又一字迄話舊事此地人口三千と云

(籠頭) 森寺書狀到來

同十七日 晴恰如我小春節十字半よりキット、スコット之家に至るイユルキーは當地に住居す同人又案内して
ードイユルキー之家に至るイユルキーは當地に住居す同人又案内して
ホテイトースを以くす粉の如きものを製する所に誘引せり其よりア
マニンを以油を製する所に至りまたアマニ草を麻緒の如く製する
を見る其より又一農家に至り馬豚野菜且麥の(こんのふ)等見三字過イユ
ルキー之家に歸り食事を認むソツブ恰如日本の雜吸味亦佳是をスコッ
トランド之スコチホックと云と語れりイユルキーは篤實の人にて且勤
勉して相應の貯財をなせりと云家も此市中にては相應の美宅にてパン
クをなせり五十歳にして未娶婦と云五字去てブルント、アイラントに歸
るこゝにてキット、スコット、に別れ直にエーヂンブルグに歸る
佛より入江文郎の書狀龍動より三條公師匠より書狀到來せり○大使始
皆歸宿

同十八日 晴終日室居養病家書到來宇青木周藏より十月十六日同五日の

書狀朝夕兩度に達せり

今日達せし御用狀中に西郷參議元帥に兼命山縣兵部大輔中將兼命の事
あり余窃に不堪浩歎昨年粗此議論を山縣より承知す依て余直に其否な
るを論ず文明の各國政體の善と賞するも其一端を云ば文武の任判然と
相立ち亞細亞諸洲の不及ところ也又帝王の國は帝王共和の國は其統領
多く元帥たり皆偶然にあらざる也況我
皇國復古の所以も是等の復古する肝要事件にして天下事あるときは將
來天子如古其元帥たり然らざれば太子親王これにかわる是則一新の
規模にし人以不疑然るに今日此事ある不知其所以譬今日又廢止する
とも一新已來此一例を殘す實に千歳の遺憾也

(籠頭)
日曜

同十九日 雨十一字エーヂンブルフを發すエーヂンブルフは土地も閑雅人
の主人も送て車に來三字過ニユーカーカストルに至りステーションホテルの
り賤菓實如我國の風

木戸孝九日記第二 (明治五年九月)

十九番の室に泊す大使大久保山口などは今朝十字先發して(以下三行空)

同廿日 曇養病三字頃迄室居其後福井市街を巡視しマーケット、カットルにて彼の家に使節一同至れり十一字過歸宿○今日大使其外石炭山并ア、ムストロング之製造所に至る伊藤等今日此宿に至れり

(磁頭) 芳山福原書狀到來

同廿一日 晴終日室居養病蜂須賀森寺など來訪河北へ託し光田小倉河野へ書狀を出す

同廿二日 雨當日は則

天長節也十字ニユーカーツソルを發し二字過ブラットホルドに着しメヤ、トムソンの案内にてビクトリヤ、ホテルに至る此地待遇の趣如米國人口は十五萬と云メヤー并にチエンバー、オフ、コンメルス、之大統領始社中來て演述せり大統領ロー并に書記官などの引受にて晩食を饗應せり八

字頃より音樂場へ案内し十一字歸宿室は四十六番也

同廿三日

晴十字頃よりトムソン、ローの案内にてソールテチャーに至るツラ

ホルドより三里ソールとは此製作所を起せし人の名にしてテヤ毛織器械所にては
一は當所の川の名なり合して地となせり人口五千餘風色亦佳
當國にて尤有名なり男女職人四千出入せり二十一年前は牧羊の地にして始て此地
て人家を不見とソールトなるもの當時七十餘歳五十歳にして始て此地
開けりと云ソールト其元は一萬ホンドを所持し南アメリカ又は東印度
に生育するアルバカなる獸の毛を以織物を發明し爲其高大の業を起せ
しと此處へ職人其外の家屋を造築し其市名へ我子女の名を以せり此中
に學校あり病院あり養老院あり寺院あり皆職人の爲に設るものにして
男女とも幼年のものは半日學校に入半日職業場に至る總て給金は一周
日に二ホントより七シユルリングまでなり製造所より出るもの凡五十
萬ポントと云家屋造築其他凡百萬ポント已上の入費なりと英政府より
ソールトへパロチット之位を與へりソールトは人となり寛容にして仁

恵あり製造家中には實に稀なるものと云

(籠頭) プライベードなり

當日ソールト留守にして子息兄弟案内し且中食を饗應す

其他アンコロゴート又はモルヘヤーとも云獸毛をも用へりエジヤマ
イナリーの産也

荒毛より織糸に至るまで八度器械を經又二度經て織物となる仕立る
に又種々器械を用ひ手数あり器械は一十馬力也

當所のチエンバー、ヲフ、コンメルより晩食を饗せり同食八九十人

カーベットに二品あり染糸(ブルセ)形糸(デバリス)染糸は模様表にあらわ
れ形糸は裏にあらわれず

同廿四日 曇九字半よりローニ案内にてハリハツクスに至る此地より八
里なりジョン、クロスレー、エント、ソン、コンベニーニカーベット製作所に
至る職人五千給金は二ポンド半より一シユルリング半迄一周日に與ゆ

ると云別に如此製作所四ヶ所ありと又其よりカードを製する所に至る
米國已來始て見しものなり此器械甚妙趣向元より不能筆カードニハリ
ガ子をさす一ミニユートに三百五十と云カードに用ゆる木綿をゴムに
て合せりゴムを推き水力器械を以二十四字しめ一大柱となし又水を冷
せし器械を用ひ三十五度の冷水に四周間ひたしたためる其をまた如紙
に器械を以剥き一片にゴムをひきし木綿の中間へ入用へり其より孤兒
院(クロスレー、チルフハン)に至る男二百五十人男女の生徒皆スクール、シンギン
院(ボーム、テンテ、スクール)を諺ひ運動場へ列をなし皆スヘリ此院クロスレーの建るところな
を諺ひクルシルシンギンを諺ひ運動せり
り一字過シチーホールに至るメヤー案内して内に入當所のチンハー、ヲ
フ、コンメルスより演述あり終て食堂へ案内し中食を饗せり同食するも
の五六十人二字半こゝを去三字歸宿

今朝森寺へ託し留守河瀬長杉山などへ書状を送れり

(籠頭) カードは綿或は毛を「シノ」になせしとき入用の器なり

水は四十度氷は三十二度

同廿五日 曇終日室居養病

(籠頭)
日曜

同廿六日 晴一字半ブラットホールドを出發しシエツファイルドに至る

なり於ステーション、チエンパー、ヲフ、コンマー、 演舌

せり其よりパンチル、クロース、之ウイルソンの宅に至る家屋随分結構庭
外の景色甚佳

同廿七日 晴終日室居養病

同廿八日 晴如前日山本重助來訪彼李白佛に至り頃日當國に歸り明日よ
り歸來すると云山田顯義スイツルより書狀を送れり

同廿九日 快晴終日室居養病夜福井來訪

十月朔日 晴十一字過ウイルソンの宅を出立すウイルソン亦ステーション

ンへ送り來るデルビー、ポルトンを経三字半バルミンハムに着しクイ
ンスホテル、に泊す室は十番也ポルトンはビールを製造する甚盛にし
て十餘里間皆酒製造所と云大使始一見せり余は依病ハルミンハムに先
着せり杉孫七郎書狀到來小條公の師 により書翰を送れり

(籠頭)
人口三十四萬二千五百五人

同二日 晴又雨三字迄室居三字より何福井ハーションと市中を巡視しハ
クに至り五字前宿に歸る

同三日 晴又雨終日室居養病食與大久保圍碁

(籠頭)
日曜

同四日 晴又雨朝十字貿易場におゐてチエンパー、ヲフ、コンメルスと互に
演舌を陳べ十一字頃チャンセスの玻璃場に至るライト、ハウス之玻璃を
製す其等一より八まであり二等三等四等を見又一等の半製其他の玻璃
を製するを見る其より針店に至り又ウエールス之鋼筆製造所に至る一

周日に五百萬を製すと云多く婦人を任用せりアストン紐鉛製造所に至る是亦婦人を仕用する甚多し木の實を用ひて紐鉛を製す恰如象牙此木は南亞米利加より出るものにしてエジテールアルアイボリーと云其外種々は此木の類あり其數甚多しまた支那の紐鉛を作る是は多く金焼付なりメヤ一の案内にて七字過晩食に饗應あり同食するもの三十餘人十字過散席

(籠頭)男女職人四百人一シユルリング半より十五シユルリング或は一ボン
ド迄と云此中に子供あり男女職人三百五十

同五日 晴大使不快なり余等十字よりメヤ一の案内にてコンスルの針金製造所にて種類數十の製造及其針金を以釘を製するを見る其よりオスレルの玻璃細工場に至る種々の器物を製する有様また成就せしものを陳列せしを見るエルキントンの銅器及金銀焼付の食器其外を一見しまた夕食器其外製造并焼付の模様を一見す此店に本邦の銅器陶器并七寶細工の器物を見る銅器等は
本邦の製造を稱し且其形も等を賞玩せり職人などを雇ひ度など談話せ

り二字前一應ホテルに歸りメヤ一始食事を認め又二字半頃よりミントに至る政府のもの政府注文にて銀錢を製造せり尤模形は政府のミントにて調作すると云一周日五萬ホンドの銀錢を調と云其より小銃製造所に至る銃名ベルゲンメモール、アハムス魯國より注文の銃三萬を製造せり米國發明

(籠頭)日本へ去年器械大小十一を送れり器械リーバー、コイニンプレスと云へりと銀一さをの重量一さをに銅二十五銀七十五ニツコルを交るあり交らぬありアウンセスドを以六十ホンドの銀錢を作ると云職人三

百

エートン、エンド、プロゾル、コンベニー

當時政府にて百萬ホント注文せり
千八百六十二年にイタリー政府に注文せり一周間に二千挺を調へり職人七百製造所は十年前に建しと云臺木はイタリーをルナット木と云其他新發明銃マーチチあり

同六日 曇九字よりウスタターに至る此處人口四萬二千と云シロブヒルス
テーションにてアルソツブ余等を迎へ同車し數里を行カーセレチユー
ト之家に至る酒菓を取る此家四壁の畫清人の筆にて支那の人物也百餘
年此壁に張れりと今日狐獵の催あり此家の前に獵行の人皆集る凡五十
五人犬を指揮するもの三人總て皆騎馬也犬は三十七疋一群となりよく
命令に隨ふ此處を出で二ヶ所の林を狩る狐一疋を出し終に得る能わす
して時已に移り此處を去りカーソレチコートニロエル、ボースレン、ブ
クスに至り陶器を製造するを見る 本邦のものを摸せしもの甚多し
本邦の品近來從前の形ちを變して製造す然るに從前の形ち尤可稱もの
多し今日の様子漸々其美の捨るを歎すと語れり近來當世流の邪鄙なる
ものを製し又は西洋等に摸するもの却て我自然の風よろしきものを
廢棄せり此製造所は九十五年前に創むと云 陶器皆四五度より八度までの手數を經り三字
半ウスタターニホテルにてアルソツブと同食し四字半乗車五字過バルミ

ンハムに歸り五字半此處を出立しクルー等を経九字ヒートンカツソル
近傍のトルマセ之宅に至り泊す尤大宅にして恰如カツソル

(籠頭) 當國政府はマーチネとシナヒトル合せて二萬を注文せり政府より檢
査のもの一人此處に詰りマーチチを製造す三百六十手數を經ると云
二度め則藥をかけ十六字間(以下欠)
樂りはクレーズと云り初四十八字間

此余は畫の數により二度も三度も焼けり職人男女五百
同七日 快晴臥室の窓より外面を望めは風光甚妙臥室は數層の上にして
樹上の風の爲に動搖するは數丈眼下にあり八字半如前夜一家内と食事
を認め九字出家クルーを経ストツクに至るミットンス陶器製造を見る
趣向昨日見るところよりも大精巧に至りては難相分是又日本近來の陶
器古來の形ちを變するを甚惜めり職人男女千五百人此處にて食事を認
めトルマセ之家に歸れり于時過五字夜食事後主人一家を集め講經余亦

傍聽せり

同八日 曇八字前上山或は樹木の間を遊歩し八字半食事を認め九字出家
到于チエスター州のノースウキ此間十六里蒸氣車の期を失し往來馬車
也ヘルゲン社の長 迎て一屋に案内し鹽石の種類又自然の鹽水を見せしむ其よ
り鹽穴に入る直下すること百二十ヤール此間六十ヤールの處に鹽脈あ
り下の鹽脈厚さ三十六ヒート穴中三十餘スクハエル柱としたる鹽石を
残し縦横に穿通し上下或は三間或は四間其幅に至りては或は十間或は
二十間三十間左右數千の燭を點し恰如都府の大街實に一奇觀也穴中各
コンベニーありて境界あり一處石を穿ち鹽硝を以摧くを見る此受け廿
人と云一人一日に五トンの石を摧けり此石多くはベルギー、ホルランド
へ輸出せりと一トンの値五シユルリン半と云英國に用ゆるものは多く
自然の鹽水を以製せり又南米國等へ輸出すると云是を製する所七里ほ
ど離れり此處に至り一見してステーションに歸る已に六字なり七字過

トルマセ之家に歸る

同九日 晴十字過此家を出トルマセ案内し花園農家などに至りまたトル
マセ山頂の家宅へ凡一里ほども山下より器械を以水をおくれり則水の
力を以水をおくる趣向甚妙佛人の發明と云ステーションまで家内送り
來れりトルマセは男女二子と余等をチエスターに同行し裁判所獄屋古
寺七百年前造の處あり又古風の市街等を見せ此處のステーションにて別る于時二
字過なり尤迅速なる蒸氣車に乗り一字に六十里を馳六字過龍動に歸り元
の宿元の室に泊す○寺島河北來訪
青木より毛裘を送れり

同十日 晴又雨終日室居爪生内海小室河北等來訪十字過寺島來館女主謁
見其他後日の都合を談す六字過伊藤來て南貞介の寄留せるアメリカン
ジョイントナショナルバンク之困難を告げ爲其南貞介并同人同居の英
人某に面會し其趣を一々承得せり雖然其所致如何とも難致依て使節一

統談合の上吉田少輔へ探索吟味を托せり爲其伊藤吉田の處へ至れり此
バンクへ日本書生と使節一行の金を預けしもの不少余亦其一人也
(龜頭)
日曜

同十一日 晴朝吉田來館前日の一條に付周旋せり寺島芳山戸田來訪ハン
ク困難の一條に付人々皆狼狽の色あり其形様筆亦不及尤其中の奇たる
ものは鹽田書記平生交情刻にして甚愛金然るに係此難曾て鬼の異名あ
り今日誰の戯歟鬼の目に涙バンクの御分散と云狂歌あり又一に白はき
に見とれもせぬに百ポンドとんと落たる久米の仙人是は久米の風姿甚
雅朴人稱仙人然るに同人平素儉素猥りに不散豈圖又係此難依有此戲

(龜頭)
三條公子の書を落手せり

米國ボーストン昨日より大火の新報あり

同十二日 雨又晴又雨安川來訪西岡逾明佛國より書を送れり二字後スト
ルフ屋に至れり西川を同伴す六字歸宿青木へ一書を送れり

同十三日 曇十字過より安川寓に至り英國の政體書を調ぶ小室亦來會六

字歸宿今朝佐々木和三郎來訪夜散步

(龜頭)
正二郎平原書狀到來

同十四日 雨終日室家アレキサントル印度學一條に付來話福原恭助西島

青甫書狀到來青甫晴湖各一畫帖を送れり

(龜頭)
野村靖書狀兩通達せり

同十五日 雨富田青木默雷書狀到來せり今日

天長節を祝せり去月廿二日は使節一統旅中故延て今日に至れり使節一
建理事官隨從在留華族アレキサンドル、ア、ストーン、ブランドン、ワリント
ル、バンク之長 已上四十人餘同食せり終て十字頃より使節一統
寺島等と外務卿へ談判の次第を談合せり吉田も此席に陪す

今日使節始て小禮服を着せり○(以下欠)

同十六日 曇十一字より安川の寓に至り英の政體書を取調へり四字半歸

宿今朝ブランドンと約あり彼の宅に至る宅はバルハム也同人来て伴ひ
歸れり林と池田とを同行す十字過歸宿又池田と散歩す○正木泰佐々木
和來訪芳山來訪

(籠頭) 安川寓の主人始一家と同食す

ブランドンの妻始て面會す

青木島地書狀到來

同十七日 曇又雨四字過芳山を訪ふ不在歸途寺島を訪ふ大久保伊藤杉浦
に會し一同歸宿寺島の此宅を設けしより余始て至于此

西岡中議生より書狀到來魯國の政體略圖を添へり

(籠頭)
日曜

同十八日 曇又雨戸田吉山來訪二字頃より池田と市中を散歩しギホンス、
エン、ホワイトに至る歸途寺島に至り學校規則并に富田平原等金論云々
青木一條等の事を巨細に談じ置けり六字歸宿野村靖出浮來話十字頃よ

り福井野村とアナンブラアルガヒルに至らんとし誤てアナンセヒタル戲場に至り又ア
ナンブラアルガヒルに至り十二字歸宿

(籠頭)
345 ラクスホールドストリートダブリュー

奇怪の一場也

同十九日 曇又雨十字過より西川の寓に至り六字前歸宿野村靖來話

同廿日 晴又雨十一字より長岡大野の案内にて大久保杉浦とコストムハ
ウスに至り諸局を一見し龍動のコムストハウスは大局附屬せり依て又
此諸局を一見す酒砂糖を分拆する局二あり三字歸宿芳山小室來訪六字より金銀冶社中
の招きに至れり同食するもの百四五十人此社中は凡二百餘年永續すと
云此集會所の結構實に美を盡せりと云可し祝王其他スヒーチ如例今夜國歌五六首を唱ふ甚妙十一字
前歸宿大久保は不參也

(籠頭) 三國にてコストムハウス百三十四ヶ所有り皆此大局に屬せり龍動も

亦其一也

同廿一日 晴十字與大久保トルキバスに至り十二字前歸宿過日アレキサ
ントルと有約彼の室にて中食を認教師ピール來會杉浦連城皆同席なり
ピール頻に連城へ印度學の事を談せり二字過より彼の案内にてインチ
ヤム、ミシユームに至る印度人の作物を一見す精工可驚ものあり又書
籍幾十萬不知其數歸途アレキサンドル之クロブへ案内せり結構又美を
盡せり此屋中の大額は國王及歴代有功の大將然らされは有名戦争等な
り五字過歸宿夜又散歩せり

同廿二日 曇又雨五字過より芳山を訪ふ野村靖内海孝等と會し戲遊談話
殆到于五更歸宿宅狀其他杉猿村櫻井慎平小野勝等の書狀達せり又字よ
り青木の書狀も達す

同廿三日 曇終日家居

(籠頭)
佐々木戸田來訪

同廿四日 晴國司來話二字後田中戸籍を訪夜又久米宇都宮を訪ひ不圖富

永伊勢勝大倉等と會話 伊勢勝大倉は横濱のもの也 三字歸宿

(籠頭)
日曜

同廿五日 晴又雨田中文部長與專齋宇國より來り孝人雇人一條等を談す

芳山亦來訪二字後よりランプ屋馬車屋等に至り五字歸宿夜散步

(籠頭)
大津松屋

同廿六日 晴又雨十一字より寫真屋に至る二字歸宿三字田中長與小室安
川來話佐々木司法昨日渡英のよし來話夜寺嶋に至り時事を談論す十二
字過歸臥○來月五日女主謁見云々外務卿より通達

同廿七日 晴留學生一條に會議寺嶋出席且今日外務卿面會に付尙大使の
意見等陳述十二字開散田中長與佐々木來訪四字過より與池田至于市中
六字過歸宿大使と山口外務省に至り七字前歸宿今日應接の趣尋常也寺
嶋も同行あり

今日米服部一三孝井上省三書狀を落手せり服部と來原姪へ一書を送れ

り吉尾、米へ今日より歸れり

同廿八日曇十字過より、病院に至る此病院英國第一等也

年前の造營にして其費用六十萬磅と云病院に入るものは醫者診察して然る後院に入を許す只來て診察を乞ひ藥を受けて歸るものあり院中に寺あり又醫者の學校あり製藥所あり解剖所あり又看病人の學校ありて皆其撰らひを經病人に従事する至りては實に盡せしものと可云看病人は、婦人なり一字一應歸宿又二字より裁判所に至る(以下一行空)

山田少將佛より來着せり

(繼頭) 長岡來話山田とビクトリヤホテルに至り長岡大野へ告別

同廿九日 晴又雨高崎西岡議官來訪皆昨日佛より來れり山田亦來話長岡

大野今夜より出立す

二字過芳山に至る内海亦來話戲遊至于夜半

(繼頭) 昨夜長岡へ留守帖を託す

同三十日 晴又雨佐々木司法平賀肥田田中長與來訪二字より田中戸籍河

治赤松福井とブライトンに至る三字半着せり富田平原來てローヤルアルヒランホテルに案内す于時諸室滿客不得止池田一人をこゝにとゞめ近邊のポードンハウスに至り皆泊すホテルに通ひ食事を認めり六字よりナイトの宅に至りナイト并に案内に面會す正二郎も出迎ふ數刻談話學校諸室等を一見し十字正二郎太作等と宿に歸る皆宿泊せり福井赤松も同行す

(繼頭) nightley ナイトの母七十九歳と云甚健剛なり

十一月朔日 晴田中河治今朝八字ヘスチングに至る十字ホテルにて食事を認め近邊を諸子と散歩しヒヤを一見し其よりハビリランに至り又市中を散し一應旅宿に歸り二字過ドクトルヂル之處に至り正二郎の病症を尋ね尙後來を頼み置けり三字玻璃の圍中へ海魚を容れ海底の趣き透

見せしむる所あり余曾て一見す今日又諸氏を誘ひ至れり其より又ナイトを尋ね夫妻に面會し告別宿に歸る八時二十分よりステーションに至る正二郎富田平原送り來る十字過へスチングに達す田中河治野村ステーションへ來り案内してクインズホテルに至る赤松池田等ステーションに於て不圖馬車中に田中文化部長與等會合せり實に一奇事と可云一字過まで談話せり八十九番の室に臥せり今日田中文化省の内田を同行せり

（籠頭）
福井は今夜より龍動に歸れり

宍戸

同二日 晴食後十字過より海邊の風色を一見し潮浴場に至る歸途市中を巡視し野村の寓に至り中食を認む日本料理を饗す此地の風色余之至るところ英國中にて尤佳と可言臥室の窓對山左に望潮水山上に古城の跡あり二字此地を發し五字ロンドン之チャールソンコロースに達す長與は

暫へスチングに残り田中内田はロントンにて別る余田中戸籍河治赤松とユーストン、ステーションに至り食事を認め八字過乘氣車に乗り三字半ホレー、ヘッド、に着す其より蒸氣船に乗り
今夜ユーストン、ステーションより大副使へ一書を出し置けり

同三日 晴七字キングスタウンに着す此港碇泊の便甚好其より汽車にてダブリンに至りグレシヤムホテルに憩ひ食事を認む十字より案内を得市中を巡視すバンク、ラフ、アイランドに至る諸局を一見す此バンクは九十餘年前始て開きしと云元金三百萬ポンドなりと曾て此處はアイランドの議院にして上下二院の席あり當時金を拂しところは則ち下院なり其より又カツソルに至る諸室を一見す又カツソルに屬せし寺に至る其より又一大寺に至るシント、ハトリツク、カシエイトラルと云此寺は近頃麥酒製造家のサー、アーサギストの七萬ポンドを出し再造せしと云其よりサー、アーサギストの麥酒製造所に至る其盛なる實に可驚一周日に二萬

樽を^て出すと云使役のもの七百餘人運輸の馬九十七疋あり製造は總て巨大の器械を設ける其よりヘツチグハークに至る風色又一趣也其廣七千五百エーカーありと元一華族の所有にして一周日に二ペンスの金を得爲人民に政府へ貸附せりと數百の鹿鹿處々に群集せり尤風光の佳なる處に至り暫停車歸途鎮臺屯兵所獄屋狂院^{皆大}盲院等の外様を一見し又一の^にに至り又寫眞屋に至り四字前ホテルに歸り認晩食六字過こゝを發し瀛車にて七字キングスタウンに達し是より蒸氣船にてホレー、ヘットに渡る于時十二字也

^(燈頭)此ホテル余等を遇する甚厚し

上院にアイランド王の繪をかけり

同四日 晴六字過ユーストン、ホテルに着す七字歸宿留守に御國狀達せり余の留守狀も亦達す字青木の書狀達せり二字前外務卿グランビルの家に至りフライミニストル、クラストンに面會同食せり租稅頭屬國卿など

も來會四字前歸宿戸田來話

同五日

晴十一字過より使節一同禮服を着し^{始此禮服}ホテルに至る

女主休息所へ案内す此處にて外務卿グランビルと公使ハークスに出會すアレキサンドル、ア、ストーンも同行せり無間瀛車にてウインドーカッソルに至る^{ステーション}馬の馬車にて迎へり余は大使外務卿グランビル、ア、ストーン同車なり城中に兵隊戸前に一列し余等の戸に入るとき捧銃の禮をなせり一應ひかへの間に至る^{鏡飾等用}其より又一の大席に至り此處より宮内卿案内にて謁見の席に案内あり一禮して席に入り進て又一禮し又進て女主の面前に至り大使演舌しおわり

國書出す然る後女主より其答書を渡し然して女王

天皇御機嫌の御安否を伺ひ且使節英國中遊歴の趣を尋ね繼て側のシユックペンブルを指し先年日本に至り格別の厚遇を受けしを謝す女主は正面に檀を下て立左側に王子ジュクペンブル其妹ヘートルス並立し右

側に宮内の女中七八人群立せりアレキサンドル、ア、ストーンは使節の右側を進みグランビル宮内卿某パークスは左側を進み案内せり退出のときも其禮如進時然して又一の別席に案内あり中食の饗を受け終て控へ席に歸り又馬車にてステーションに至るグランビルパークスには

ステーションにて別れ四字歸宿六字田中長與來話八字頃より又杉浦と一同田中長與を訪ひ十二字前歸宿夜雨

同六日 晴又雨十一字パークスと償金等の一條に付談判せり大使二字より外務省にて克蘭ビル、パークス等へ應接あり三字より平六公を訪ふ御不在師匠某に面會し平六公御修業方の事を尋ぬ甚懸念の事も有之依て平六公へ一書を殘し來る日曜日御來臨をこひ置けり戸田案内せり由利田中文長與來話佐々木和來て出立用意の手傳せり今日御狀を發せり同七日 晴十字頃よりアレキサンドルの案内にてウリンチ天文臺に至り遠眼鏡其外の器械を一見すアステン、グレーシヤと申兩人巨細に指

教せり其より又孤兒又は水夫等の少幼を教導する學校ありハイクを隔る而巳此ハイクは老樹森立風色、ホルニと申人案内して少幼の運動且運用の稽古等一見す此學校前に帆前船を据へ少幼の遊戯場に供せり二字過歸宿七字過よりフライミニストル、グラストン、外務卿克蘭ビル其他魯蘭白伊太葡の公使外に數客請招せり九字半皆散す

(船頭) 大久保山口何杉浦由良同行

少幼は水夫より終に才あるものはマストル位に至れりと

同八日 晴又雨又晴入夜風烈十字平六公御來訪後來御稽古の方向等云々申述置けり其より芳山を訪ひ談話遊戯十一字歸宿

(船頭) 日曜

同九日 曇又雨七字より使節一同宿を出、ステーションに至り其より瀛車にて、に至れり、プリンスヲフウエールスの別業あり此家に至る頃已に一字なり別室に暫時休息し然る後ハ

クス之案内にてウエールス夫婦シユツクヲフエーシンバルクに面謁し其より食堂に至り席に着す同食するもの十餘人ウエールス之左側へ余着席す食後家内を案内し爾後エーチンバルル庭中花室等へ誘引し四字一應家に歸り告暇ステーションへ至り九字ホテルに歸る

同日 雨三岡來訪三字頃より寫真店に至り歸途田中戸籍を訪ひ五字歸宿七字前より使節一同ハークスの案内にて彼の家に至り晩食を認め其より又 の宅に至る男女集會するもの百餘人十一字歸宿

同十一日 晴十字頃よりハークスアレキサンドル、ア、ストーン之誘引にてエクリコルチハホールに至る牛羊豚其他農具日用の雜具馬車野菜の類格別上品物と輕便新發物等を列し此會社より牛羊豚或は牧人等へ格別なるものに對し其褒賞を與へり尤高きものは百ホンドなりと云其下なるものは四ホンド五ホンドと云あり如此して決して年々牛羊其他器物等に至りても進まさるの理なし女主或は太子等の家蓄するものも此中

にあり昨日は此處に容る人民十萬餘人と云二字過歸宿夜散歩せり

(籠頭) カットルシヨ

十一月十二日 晴十字よりウイリューム店に至り机床等求め其より寫真店に至り一應歸宿又アレキサントルの案内にて大久保何とボリスコートに至る十二字過歸宿四字頃より寺嶋を訪家書河瀬安書狀等落手せり八字前より大久保杉浦とアレキサントルの案内にてホワイトチャップス、ストリート之ボリス會所に至り此夜捕縛せしもの所致等一見し此方區の極貧人の宿泊所等へ六七ヶ所至る 本邦の木錢宿と稱ふるもの、如くにして其貧困なる有様尙一倍せしが如し 二ペンス三ペンス 又貧人或は水夫等の子女ダンスの處あり是へもまた四五ヶ所へ誘引せり又シエタへも四ヶ所案内せり 其中一家所は尤貧人の至る所にして一人一ペンスなりケン アレヂミエルトコートと云是は隨分見事なれども下等なり見物人の前へテールを備へ多く傾酒して見るものなり此家の床下に至る數百の樽へゴムを傳へ皆床下へ通せりスタダルトも同様の品等なり是又一小路に誘引す此處は貧人極隘の小屋を構へ其中支那人も亦一家を構へ二十一年前當國に來ると云アヘンを

吸し様子案内人余等見せし也此處英國の一婦人も同アヘンを用ひ廢する能はずと云此婦人とカルカッタのもの同床にあり一字歸宿キニヤールト書物一冊を送れり

當日は去年余等本邦を發せし日也一年の迅速なる實如昨日こゝちせり

(籠頭) フクスホールド之三十九番ウイリユム

同十三日 雨内海野村山縣來訪與山縣サブウユーへ至り一見せり次中を下る六

十三フヒート長さ一里四分の一なり恰如桶中三字頃歸宿四字過よりトルキ湯に至り其より内海

の寓を訪山縣正案内せり野村靖服部等と會す三字過歸宿芳山留守へ來り一書を殘せり平六公の師コーリヤ余を招き知己を集め切に余の來るを待ち今晚終に八字に至り不得止皆着食一坐甚不興なりと余は只一途に明晚と心に期し此事の齟齬せし實に氣の毒に不堪なり

同十四日 曇十字よりコーリヤの宅に至り昨夜の不都合を謝せり彼遇余甚厚十二字平六公と共に宿に至り公に托して本邦の新金四五一斤を贈る

四字頃芳山を訪夜雨市中へ出

(籠頭) 二字より魯國公使

同十五日 曇十一字頃芳山に至り共に一畫工の宅を訪則我

老公の御畫像を拜見す御容像近眞畫工不拜公顔して如此なる實に巧なりと云へし曾て此家に山尾寓せりと云又芳山の處に歸る内海も同伴なり野村靖來會談話戲遊五字芳山内海野村と同車宿に歸る今日芳山の寓にて正木三井山縣等と告別六字パークスアレキサンドルア、ストーン寺嶋吉田と同食別杯す

毛利宗公毛利平公鍋嶋蜂須賀前田萬里小路華族小室安川三宮古澤土方志道石田林服部階柁山鼎

同十六日 晴五字起六字半認食七字發宿ホテル中のもの皆出送るヒクトリヤステーションに至り上車送るもの數十人佐々木和昨夜ホテルに泊し送て又來十字前ダブルに至るアレキサンドル龍ヲ氏送り來告別直に

上蒸氣船幸に今日風波別に烈しからず此海峽は風浪常に烈しき處と有名なり十一字半カレーへ着す佛のセネラール(十餘字欠)使節を迎へホテルに至る路傍兵隊を左右に整列し捧銃の禮をなす土人男女路傍に充滿す風俗も亦自ら英と異なり食事中戶外にて樂を奏す二字頃發此地六字過巴里に着しブレスボリー十番の屋敷に泊す是は官に屬せし家にして曾てトルコ公使館に用立しものと云相應の構にして戶外に第一世ナバレランの築きし大門あり世界第一の大門とも可云今夜公使ウートリリー來訪

同十七日 曇二字後より大久保大原杉浦岩下とアキスホリシヨズボアールに至る是は油繪を四方へ張り光線を引字兵の巴里を圍しときの景況を其まゝ寫せしものにし其趣向實に巧を極め迫真いかばかり眼を疑し其表にそゝくとも繪と見る不能圓堂にして此景は樓上なり樓下に街戰是は内亂之趣を寫せし油繪あり趣向如前只其一部を見る而已其より一

世ナホレランのエシプトより取歸りし一大柱石の碑を一見し宮殿の燒失せし跡を見左手に廻り市街に出もと一世ナホレランの石像を建しところに至りクランドホテルの前を通り市中を一見して歸る今日東願寺默雷河内宗毛利など來訪余昨日來風氣あり押して外出し至此夜脉一稍時間百三十に至る近來の一苦なり

同十八日 曇又雨終日臥床養病福井來て診病西岡來訪佛國の圖と巴里の圖を與へり夜默雷等來話

(龍頭) 鮫島來話河北書狀到來青木書狀同斷

同十九日 曇又雨村田新檜崎雷西村某華族西園寺來訪河野岸良鶴田司法省連又來話岸良留守より頼し書狀其外楊持等持參せり由利龍動より昨夜來着せしよしにて來訪せり夜西園寺檜崎來話得病間留守を認め置けり

(龍頭) 藤井八十衛書狀始て到來す

同廿日 曇又雨由利へ書狀を託せり鈴木中議生來訪西岡より柘榴を贈れり夜默雷來る

(燈頭) 青木へ返書を出す山田へ一書を送れり

同廿一日 曇又雨富田平原より書狀を送れり御用狀到來傳信あり本邦來正月より西洋曆を用ゆると

同廿二日 曇又雨今日快氣せり二字外務省懸 來訪三字頃より林

池田書記福井等とブハ、デ、ブロンを経其よりサンクルーに至る此處はナ

バレヲンの宮室あり字兵の爲に灰塵に屬す終に其外様を殘せり又兵隊

の屯所あり歸途セイン河にそひモンハリイン砲臺を仰き見字兵此地に入るとき此砲臺

守而已孤又ブハ、デ、ブロンを経其より巴里王室灰塵のあとを一見し河にそ

ひ四字過歸寓七字頃より大久保村田岩下と 劇場に至り十二字

歸寓檜崎西岡來訪夜岩下案内にて與大久保至于劇場

同廿三日 快晴龍動已來如此の天氣甚稀一字訪鮫島辨務使二字より外務

省へ大使一同辨務使の誘引にて至る卿レミユザル夫妻に面會スウィートル
案内にて第一世ナホレヲンの廟に至る石櫛を一見す堂宇皆各種のマー
ブル石を用ゆ老兵院此廟に接す當時六百人餘此院にありと或一室に至
り歴代の帝王或は有名の將校且ナホレヲンの畫像等を一見し又四百年
前よりの甲冑武器等を陳列せし一室又古來の大砲の變革或はシーザー
などの用ひし橋梁等と雛形陳列せし一室に至り盡く一見せり四字過歸
寓夜大久保大原と見曲馬

同廿四日 晴十字過ウートルを訪ふ大久保伊藤鹽田同行十二字頃より
使節一同リクセンヒユルグ、ミジユームに至りパークの中を散歩し其よ
りマーブルの彫工額面等を一見し又禽獸園に至る此處鑛石數十萬を陳
列せし一大屋あり盡く一見し四字過歸寓夜散歩しグラントホテルに至
り田中福地等を訪ふ

今朝青木周より書翰を得る字政府より我
天皇陛下と老臣兩三名へ賞標を贈らんこと欲し我受哉否を彼公使より
探索せしにて其趣を青木より余に告げり使節の議論一定せざるにより
又其趣を報告す

同廿五日 晴十二字旅官前ての大門へ

第一世ナポレチン
築きしものにして

福井池田と登り巴里

府中を一望す二字過より西岡遠藤の案内にてノースタラダムに至る里

第一の寺なり其より又市中を一見す今日はクリストマスにて人民市中に充滿

其繁雜倍平生五字過歸寓今日出入の仕立屋に至り又
一店に至り象牙の杖を求む八字頃より西川池田山

口等と松浦の案内にてタンスを一見す

(籠頭)二百八十餘檀あり

山田より書狀到來せり

松浦は勝三郎と云り

同廿六日 晴飯田吉次郎光田三郎柏村庸之允來訪セネラール

マ、(一行欠)

一字前旅寓に來り彼の案内にて二字前大統領チャの宅に至る政府の馬
車を以使節を迎へり途中は二イスカドロンにて前後を警衛す大統領宅
の門内には歩兵整列して捧銃の禮をなせり面接の時はチャの左右に外
務卿其他七名相列せりウートリーも其中にあり演説を陳へ國書を渡し
チャより其返辭を陳へ終てチャ使節を誘ひ妻へ面會せり三字歸寓其よ
り又外務省に至り卿へ一禮を陳へ直に歸寓卿又來訪過日之禮を陳へり
七字山田市大田徳二郎來訪二氏今朝スイツルより來れりと二氏と市中
を遊歩し十二字歸寓

田中文部の書狀達せり

(籠頭)飯田は蘭光田柏村は白に留學せり

同廿七日 曇一字頃より内務大藏司法陸軍海軍文部貿易工部諸卿を訪ふ
内務大藏而已在宅餘は皆外出中なり使節一同通辯は池田なり夜山田顯
來訪共に市中を歩行せり

同廿八日 晴十二字過より英土の公使を訪ふ使節一同通辯は鹽田なり三字過より鮫島の案内にて齒醫者に至る米人なり名は歸途鮫島に至り晩食を認む書記長田珪二郎と不圖話舊同人は七年前與幕府兵を構へしとき佛船軍艦佛公使ロセス乗組下ノ關に來り談判せり佛は舊政府を援けロセスも談判大に我を抑ゆるの意あり彼田ノ浦文字の放火の跡を見大に我を責む此時長人皆佛公使と談判を不欲不得止余公使に面會し依て彼に答て云元來公使は我内國の情實了知有之間敷今日幕と兵を構する我好むところにあらず雖然幕不盡條理兵威を以て迫我已に大島郡へ襲來し此地を放火し民人を苦しむ余等今日只知有生國長州故に田ノ浦文字等へ兵を備へ已に襲來の形勢を察し後るゝときは其害を受る必然なり依て我より先し終に到于此是不得止ものなりロセス別には是に應答するなし暫ロセス云卿等も大に苦心なるへしと余答て云時勢の終に至る今日偶然にあらず天の血を以太平を求めしむるの前兆歟と又竊に相樂み候云々今回顧するに實に如

夢此時長田は佛船にあり中頃出て通辯せり其時不知其名當時余等至于佛國不圖同人と話するも亦奇と云べし十一字歸寓

同廿九日 曇一字頃より埃伊斯字の公使を訪ふ七字過より田中福地などとホテルに至る與福地隣室の浴に入る浴室の結構可云盡米英中にて未見ものなり十五日來始て入浴尤愉快を覺ふ浴後談話數字十二字歸寓今日青木周より賞表一條に付又書を送れり議論受納するに不決依て其返答を認め又傳信を出せり

(籠頭)字の公使は公使中有名にして字國の一人物と云償金一條の決末も此人

十二月朔日 二字頃より何鈴木福井バラヤロヤードに至る店肆の趣向甚妙往來も尙如行屋中五字歸寓七字過より外務卿の招にて役宅に至る同食するもの五十餘人總て各國の公使或は書記官等なり食後又數百の來

客屋中に充滿す公使の妻其他婦人も亦多しビルマンの使節も亦來會す結髮如朝鮮人尙以白布頭に結ふ衣亦白布肩より斜に金色の鎖を懸けり余始てビルマン人を見る十一字前歸寓姪彦太郎より書狀達せり青木より傳信を送る昨夜の傳信齟齬せりと察せらる依て又昨夜の次第を詮議せり

同二日 晴十二字過より大久保杉浦大原とビュットショーモンに至る此處は自然の山阜をパークとなせしものにして又一奇なり三代ナポレヲンの作りしものと云此近邊は貧人多く市街も甚不潔なり歸途トルキバヌに至る七字歸寓

○編者註。
十二月三日
を以改曆日
ち明治六年
と爲る。

明治六年

正月元日 過日太陽曆御用ひの傳信到來依て當日を元日とせり快晴九字寓を出十字ベルサエルに至るホテルに小憩し食事を認め十二字半大統領チャに面會し當日の祝辭を陳ぶ此處は元ベルサエの知事官宅と云同行は使節一統辨務使鮫島書記鹽田池田辨務使付長田桂二郎桂なり各國公使其他百餘人堂に滿つ其より外務省に至る此處に王宮あり千八百七十年李國王此城にて獨逸皇帝即位の禮を行へり又此地の離宮庭園に至り諸室珍器畫額等を一見す其中に初代ナポルヲン其外諸王の用ひし馬車數挺を見る實に其華美人目を驚かすに足る四字過歸寓今日賀客又不少八字前より何バロンと市街に至り十一字歸寓
今日御國より留守狀并作間一介の書狀達せり去八月四日の日付也

同二日 曇二字前よりノートルダムニ至り又マールケルに至り四字歸寓夜
山田市の旅宿を訪ふ不在十字歸寓

同三日 晴又雨毛利内匠山田市來訪二字より齒醫者ロード米人の處に至
る何バーソン同道なり其より余は山田の宿に至り山田大田渡りと市街
を散歩し十二字歸寓

(龜頭)
今朝渡六之助來訪

同四日 雨腹痛下痢にて苦む終日家居養病小室島地由良來訪御國御用狀
達す青甫よりの書狀も落せり

白耳義より河野光太英より佐々木和富田貞平原太兒正二郎よりの書狀
到來

同五日 晴終日室居養病山田市大田鈴木佐々木司高崎小室など來訪小室
明日より歸英に付芳山平原佐々木兒正二郎への書狀を託す正二郎佛書二册留守狀二通

筆一包を
添へり

同六日 晴十字山田市大田德來訪兩氏案内にて與大久保伊藤杉浦連騎サ
ンクルーに至り小憩し食事を認め其より歸途河岸を傳ひ巴里に入りま
た河岸を傳ひ右折してアベニューゾラグラントアルミーに出て四字
前歸寓夜大久保大原杉浦と窮理の劇場に至る手つま寫繪等なり十一字歸寓

(龜頭)
湯屋に至れり大抵グラントホテルの趣向に同じ

同七日 晴十二字よりマルシヤルの案内にてミントに至る佛國元來三ミント有り一は欠四
字一ハストラピュルグ今ストラフボル 其より貸付所に至り藏内其他を一見
クは字地となりミント二ヶ所となれり 是此出張所別に二十ヶ所ありと云トと云 當時貸付金高七百五十萬ポ
ント其利金一年凡(欠八字) と云此利金は皆病院の費に當ると

同八日 晴二字より福井何と市中に至る大原に逢四字過共に歸寓す夜山
田を訪ひ十一字歸る

(龜頭)
英國ブライトンの正二郎師匠より書狀を送れり

同九日 晴二字より何バーソンと(欠九字) に至る此處は英國

スコットランドの女王マリの住し處にしてローマの古物數千品其他種々の古器を陳列し來觀するもの不少此側にローマ時代に築造せし古寺の跡とあり是等を一見し歸途ハット屋に至り市中を巡廻して歸る山田來訪夜共に鮫島に至り又共に散歩せり
小岩倉青木より書狀到來

同十日 曇一字より山田の宿に至り大田と共に 〃の家へ案内せり
又案内を出しガラス店食器店陶器店へ誘引せり與山田數品を買得す五字歸寓

頃日四五日米政體書を讀めり

同十一日 晴昨夜青木來着せし由にて今朝來訪十二字前よりサンクルーの陶器類古今數千種を陳列せり四字過歸寓本田外務一等書記今日巴里に來着同人は寺島辨務より申越せし也此便を以杉山耕太郎島田助七八十衛勝三郎青甫惣兵衛等より書狀到來留守狀も在其中夜青木來話終に到二字

同十二日 曇又雨今日は父公の正忌也往年を追懷し自ら鬱然たり西岡鈴木の誘引にて與久米由良福井サンセルマンに至る此處風色亦佳モンアレヤン山の砲臺に對し此間に水流を帶ひ村家廣原等あり一店に小憩し四字過歸寓山田より案内あり使節連彼の宿に至る日本料理を饗す歸途鮫島より案内にて劇に至る興甚少十二字歸寓井上世外の書狀到來芳山より又書狀を送れり

(籠頭) 日曜

同十三日 晴十二字より久米と西岡の寓に至り佛國政事書を取調へり三字過よりロンベルホテルに至り佐々木司法輔を訪ふ五字過歸寓七字セネラールアツベルシヤノハン公使ウートリイ等を招けり

(籠頭) 土人片岡某に面會す巡視連の一人也

青木來話

同十四日 晴九字半より久米一同西岡の寓に至り如昨日山田大田と又園

城の寫繪を一見し其二氏の寓に至り共に又ハレーローヤに至り一店に同食し小劇場に至る本邦茶番趣向甚奇其中メツツ其外新に字國へ屬せし人民の字の支配を免れ佛に歸するを希望するの情を謠唱せり一字歸寓

長野てつ珪林董岡口等今度歸朝せしに付暇乞に來れり

河北（釜頭）義平原太龍岩倉正二郎等より書狀到來

同十五日 曇毛利藤田來訪十字三十分よりサンシエール兵學校に至る

の案内にて校中盡一見せり此處は重に歩騎の學校なり體術等未見の術を一見す米のウエストホインと同じ歸途ベルサエルにてルイ十四代の宮殿を一見し且其庭中を散歩す高壯當時を可思見ものあり宮殿等は世界に有名なりと云五字十五分歸寓七字佐々木司法を訪ひ歸途山田を尋ね共に散歩せり

（釜頭）今日シノハン誘引せり

此校中にてナホレヲンの畫像を見る畫中にて未見の妙筆にして恰如生

同十六日 晴九字半より久米と西岡の處に至る如例二字十五分よりマルシャルの案内にて巴里の下水道に至る其趣向の妙且宏大可驚地中一道を開き鐵筒を以上に清水を縦横に引き且傳信の線も皆此道中に入り下は下水にして恰如河其左右に道ありて或は車を遣り或は舟を浮へ又世界の奇觀なり水道大なる處は上下凡三間横も略同し左右に小水道あり共數不可知下水の亦大眼底を通ふ處あり至于此又一見せり四字半歸寓六字より大原令之助を訪ひ告別留守狀を託す歸途大久保と一店に至る八字半歸寓青木嶋地福井來話八十衛勝三郎等への書狀を認む余今日胸痛あり

天野清三郎平原太作書狀到來

同十七日 曇十一字半よりシャノワンの案内にてモンワレヤンの砲臺に至る此砲臺巴里近傍におゐて第一の堅固なるものと云先年の字兵の巴

里を圍し時も此一砲臺而已字兵不能破大砲小銃の庫士官兵卒の陣屋等を巡視せり小銃大砲等其手入米此砲臺は五千の人これなきときは是を守る甚難しと云四方を遠望する風景尤妙サンゼルマンへ九千ヤールと云字兵のサンゼルマンより放せし砲彈の跡尙存せり三字歸寓青木周長田珪書記官を奉命せり

同十八日 曇又雨十一字半よりエンヤンの誘引にてハンサン兵學校に至る此處は専ら大砲科の學校あり元シャル第五世の築きし古城にして去今六百年餘と云樓上に登り巴里其他一方を一望す高さ五十四メートルと云當時士官六十人卒三百人あり小銃四萬五千挺を備し武庫あり大砲も亦數百を貯置し處あり此近傍凡一里許の地に壘あり常に士官兵卒體術を試む至于此數百人の習藝を見る歸途一陣屋に至る兵卒二千五百人と云又兵士の病院に至る當時六十入院に入るものあり四百人を容るゝの病院と云五字半歸寓六字半より山田を訪ひ大田等と佛人の角力を

見る本邦の角力の如し一字歸寓

(燈頭) 田中文部肥田定船來訪

寺嶋辨務使英より來る

同十九日 雨マルシャルの案内にて十一字よりホンテンノローに至る巴里を去る三十里二字此處にて中食を認め宮殿に至る歴代の王(一行空)

爰に住せしもの多し宮殿内の美麗堪驚目有寺有劇場盡備る庭園も亦甚廣し四字過ホテルに歸り六字食事を認め九字過發爰十二字歸寓同行は使節一統杉浦安藤久米且寺嶋河野(河)も加われり

同廿日 晴十二字半よりエコールデホンエンシヨース道路橋に至るプロヘツソル十五人書生百人餘佛國中にて格別建築の雛形多く在于此校其より又エコールデミン礦石學校に至る書生百十五人フシシテント、ブリー余等を遇する甚丁寧を盡せり兩校共皆工部省の管轄なり兩校の書生試験をと云五字前歸寓夜田中文部を訪ふ不在山田を訪ふ又不在

(籠頭) 外國書生四十人千七百八十三年の造築と云此校尤廣大也

同廿一日 晴又雨佛國ハンクへ十二字頃より至り諸局金藏等を一見せり
英國ハンクより規模稍小 金藏の貯金七億九千萬フランクと云 其より毛織場に至る 是は政府の持にて此處にて織しもの多く政府より各敷ものあり或は懸壁のものあり其精工不賞數尺を隔てこれを見るときは眞の洋畫の如し指を以あむその用力實に尋常にあらず或は數人五六年を経漸完成するものありと云依て又値も不下是より又コーヒー菓子の製場に至る一々器械を以てせり五字歸寓長與專齋李より來り今宵尋來青木島地小松等來話余八字より山田に至る

(籠頭) 御用狀到來

同廿二日 晴又雨十二字よりラプセルアトハールに至る英國グリニツチより規模稍大 此處コンミュンの節病院となしコンミ 此中の其器械を盡く一見す其より裁判所第一等に至るクリミナルの裁判を見る 女にして其夫を殺せしと云もの、調

べあ此裁判所の傍に一寺あり裁判所に屬せり其造築實に精工と云可し去今六百年前に築しものにして尤カドレーキの盛なるときと云王は九世シヤール也其より牢獄に至る其規模英米も亦不及 此中に製作場あり病院あり親戚朋友に面會する處あり浴室あり集會所ありカドレーキ、プロテスタント、デュー等の間聽所あり書室あり 歐洲中にありて有名なるものと云六字過歸寓長與河北來話

昨日御用狀到來

(籠頭) 朝到于西岡

同廿三日 晴九字過至西岡の寓如前日十二字よりマルシヤールの案内にて金物の製造所に至る其より啞院へ至るベレールの像あり トガルの人はハル啞人を教育することを發起し其術を佛英等へ至り廣めしと云此 又盲院に至る ハル人は千七百十五年に生れり此畫像も啞兒を教導する形様なり 又盲院に至る パリ ンタインホインのスタチューあり夜雨

啞院育院とも今日休暇なれども啞人の自由に種々の細工等をせしを見る盲院は明後日爾來を期して去歸寓の時五字也夜寺嶋青木河北等來話

(籠頭)
ヒユツタタテヤエ

過日來山城屋和介變死の説あり今朝其傳信を聞爲彼甚歎
佐々木和書狀到來

同廿四日 晴朝到西岡の寓入江文郎來話三字過より與福井山田の寓に至り其より又河治と共に市中を散歩しランプを求む歸途一店にて食事を認め共に田中健を訪ひ十字過歸寓正二郎平原等より書狀到來

同廿五日 晴青木長與來訪二字より魯國公使の處に至り三字過歸寓無間又盲院へ再至り盲人の讀書工作奏樂謠歌等の様子を一見せり男女三百餘人民二千の内に凡盲人一人位ありと云且盲人は啞人より自ら從順のもの多しと是等は本邦の盲啞と反^て躰せり五字前歸寓芳山五野村靖内海精天野清平原太兒正二郎へ書狀を出せり嶋地默雷來訪彼曾て頼談せしにより四百磅を貸與せり夜與福井杉山河路の寓に至る

同廿六日 曇至于西岡の寓一字過青木長與嶋地福地等來話夜田中文部長

與等と有約六字過より長與の寓に至り田中と相會し文部省の事務且教育等の事を談す當時於御國着手するところ事實齟齬し總て百端粉飾の開化を主とし天下後世の爲不堪歎ものあり聚首談論至一字餘歸寓する時已に二字に近し

同廿七日 晴至青木西岡之寓一字よりベルサヘルの議院に至り議員集會の形容を一見す歸寓する時六字也

青木今夜より字に歸れり

同廿八日 晴朝至西岡一字半より田中文部今村和郎と中學校に同行し校中の様子を一見す九級あり一級中又數室に分る一室に四十人五字歸寓六字より司法連河野始の招にて彼の寓に至り本邦料理の饗應に預れり十字前歸寓

同廿九日 晴朝至西岡田中戸籍福地等來訪六字より山田に至り大田等と散歩す一字歸寓

同三十日 曇一字頃より雪降る朝如早晚至西岡三字半より學師ブルツク
の處に至る六半歸寓長與田中來訪皆今日より出立歸 朝せり長與へ井
上への書狀を託す田中へ暇乞に至り其より又山田に至る

(籠頭)
山田大田留守へ來訪

同三十一日 曇朝至西岡二字より山田大田を訪ひ告別夜七字より外務大
藏工部文部海軍陸軍諸卿公使ウートリ巴里の知事と旅寓に同食す姪彦
太郎名和緩へ書狀を出す

二月朔日 曇至西岡二字半より田中戸籍を訪ふ夜近傍を散歩す默雷來話
同二日 雪又晴野村靖昨夜英より來着今朝來訪十二字半より何野村福井
とパーテブロンに車行し其より又市中に入數ヶ所を廻行し四字頃歸寓
今夜フルーク學士を鮫島へ招けり余も亦加席せり

(籠頭)
日曜

同三日 曇至于西岡二字頃よりクラントホテルに至り入湯せり

同四日 曇至于ロードピロンホテル二字頃より野村福井と戦争眞景の畫
を見る其よりグラントホテルに至り田中等を訪ふ不在又ロードビヤン
に至り四字前歸寓夜又與野村グラントホテルに至る

(籠頭)
過日安川より書狀を送る依て返書を野村に託す

同五日 雨至于ロードビヤンホテル夜左院連の招きにて使節一統ロード
ビヤンホテルに至り十一字前歸寓長與專齋長三洲へ書狀を出す

(籠頭)
野村歸英

同六日 曇又雨到子ロードビヤンホテルに至る夜學士ギト一の宅へスハ
レートに至る十二字前歸寓

同七日 雨朝到子ロードビヤンホテル夜八字何と雜物店に至り歸途余グ
ランドホテルに至り田中福地を訪ひ談二字に及ぶ三字歸寓

同八日 雪朝到子ロードビヤンホテル夜ブルバールト街に至り玩物二三

を求め歸途近傍を散歩由良來訪

同九日 雪朝到于ロードヒヤンホテル學師ブルツクス來訪饗晚食鮫島も亦同席也肥田來訪

（籠頭） 檜崎來訪芳山河北より書狀到來芳山へ返書を出せり

同十日 曇二字より香具製造所へ至り製法の大様を一見し五字過歸寓由良肥田島地來訪

同十一日 晴到于ロートヒロンホテル二字半より訪入江文部郎談話數字且鮫島の托をも相談許諾せり五字過歸寓

（籠頭） 島地來訪彼へ七百ホンドの借財を周旋し其手形を落手せり

同十二日 微雪到于ロードヒヤンホテル夜田中を訪ひ不在近傍の衢街を散歩して歸る于時十二字也

今日凡十七日より出立の事相決せり

同十三日 曇到鮫島一字過歸寓夜與池田ブルバールツチタリヤンに至り

雜物を買得せり歸寓する時已に十二字河内宗一來訪

同十四日 晴到于西岡寓會計の課を取調へり夜西園寺殿檜崎頼來訪兩氏の誘引にてハレローローヤに至り同食す其より茶店に至り小憩し市街を散歩して歸る

同十五日 晴毛利藤來訪十字より齒醫に至る二字より外務卿を訪ふ不在三字後浴湯へ至る此夜西園寺檜崎河内の誘引にて踏舞を一見す男子多くは種々の装をなし女子は盡く半面をおふ黒絹を用ひ或は種々の面を以てす見物の女子も半面をおふわさるはなし手を連ね對舞するもの女子の顔誰々たるを知らず毎日曜の前夜十二字よりはじめ曉に至ると云米歐一種の妙觀なり

同十六日 晴十二字公使ウートリーを訪ふ西園寺檜崎鳴嶋其他客來多々鳴嶋の周旋にてローマの古金銀銅錢數種を得る六字よりベルサエルに至る大統領チエルの招なり同客二十餘人フルツクも亦後より來會す今

日フルツク書と地圖を餞す十一字過歸寓

默雷來話到于三字

(龍頭)
日曜

同十七日 晴客來如山三字旅寓ノードフルスブを出立しシマンドファイルデ
ノールステーションにて瀛車に乗りラウンにて小憩しフェーデに至
る此地は白耳義にて運上所あり政府より 使節の迎として出せ
りモンスに至る已に十字なり此處のステーションへ王の瀛車迎として
差越し兵隊の警衛等甚丁寧を盡せり小憩して此車に乗る此地の人民
群集如山十一
字半プロシユルスに着しベルヒューホテルに至り八十六番の室に泊す
福地源一郎小松濟治等巴里にて別る福地は默雷とトルコより印度地方
に至り小松はヲーストリヤに至る

同十八日 晴一字 誘導にて王宮に至り王國レヲホルト第二
に面謁し又皇后 面謁し二字歸寓宮殿の結構甚美麗なり三字よ

り行政官の長を尋問し無間歸寓其より田中池田ポータント人口バンと
同車し市中の古跡又は名ある處を巡視し府外の林に至る此處一池あり
氷上に戯遊するものあるを見る曾て此話を聞現事を見る今日を始とす
六字歸寓周布金槌河野光太郎來訪夜田中池田と散歩す

同十九日 曇九字半より瀛車にてガンに至る此處白耳義中第三の道府に
て人口十四萬と云首府より凡四十里木綿麻布の製織處に至り一見す曾
て英國にて見るところより一層器械も場所も亦大なるを覺ふ花樹花草
を作るの處に至る皆外國へ輸出すると云此間一應奉行の役宅に至り中
食を認む總て人民の迎遇も政府の待遇も甚懇切にして其厚きを知る夜
八字より王宮へ至りタンスを一見す外國公使并妻女其他文武の官員來
集するもの殆八百人趣向甚盛大也國王夫婦客を遇する甚至れり一字歸
寓

同廿日 曇八字過より瀛車にてアンペローニ至り其より又馬車にてバル

ケツト之陣屋アンヘルローエ三十五里此處よりバルケツトへ九里に至り野戰砲等の打方を一見す則此處砲臺の陣屋にて學校同様なりと云歸途アンベルローの第四之砲臺を一見す千八百六十五年に建築成就せりと歐洲にて有名の砲臺と云六千萬フラン六千と六字歸寓食後暫時散せり河野周布小倉光田來話今日寒氣甚烈

同廿一日 晴八字より瀛車にてテリーチに至る此地人口十五萬なりと其より馬車にてソラン之コツケリー八百十七年此處を開きしと云コンベニー製鐵所に至る職人九千餘此地方より鐵石炭を出し尤便利を極む其盛大米英佛等にて不見ところなり器械等も未見もの其數難數 の宅にて中食を認めり歸寓する時八字前也ソランえ凡八十里と云今晚日本公使其他數客を晩食に招けり

(籠頭) 此前の、のガラス製造所を一見す是亦尋常にあらず

同廿二日 曇十二字半より市中掛りの一官員案内にて坐板製作屋に至る

多くの用器械米國其外へ輸出すると云種々の模様あり甚精工なり王宮もこれよりありと云其より食器の製作所に至る此品は多く貧人等の用ゆ又馬車屋に至り針屋に至る此針屋の製作所は甚大也成調に至る順序十餘度四字過歸寓六字過より王宮に至る國王夫妻其他文武の官員凡七十餘人同食す其より劇場に至る王の機敷あり歸途貴族の皇后も來見すの宅に至るダンスの催にて其招に預かれり一字歸寓今日小倉周布來話

同廿三日 曇八字より小倉周布の誘導にて大久保杉浦田中久米余とヲートルローに至る凡英里十里と云十字頃相達す一人余等を案内して地圖を照し佛英其他の軍兵屯陣或は當日戰爭の模様を説けり英兵の籠りし一大屋數百の彈痕至于今殘れり此處佛英共に苦戦し終に佛こゝを落す不能と又一塚に登る檜二百二十五戰争後關人此塚を水澤當時戰地の總形を築と云石臺の上にライオンあり一目に見るに足る塚前に一條の道ありナポレオン、ウイリントンの本陣凡相離る五百ヤールなり歸途案内者の父に逢ふ當年八十八歳ナポレ

ヲンの一騎兵にして此戦に臨み于今瘡底^アありコロネスホテルにて食事^ヲを認め四字歸寓^ニ彈^ヲとまりし木片或は杖にて他のものを戯に持歸れり

小倉周布河野光田等來話至于二字

(籠頭) 千八百

同廿四日 九字出立十字頃アントベルフに至る此地人口の多商法の繁白耳義第一の地と云砲臺に至り又武庫に至る小銃二十八萬挺其外大砲等數百あり又畫額の一^ヲ大屋に至る三四百年前のもの不少此屋中に生來兩腕これなき人足指を以畫額を寫す其自在恰如手名をランフヒースと云寫眞へ其姓名を書余等に送れりコンメルハウス市廳等に至り市尹の宅にて食事を認め三字四十五分乗車コロネルセネラール等皆此處にて別る五字ローセンダールに至る此處は則蘭領なりデ、ハラーフハンホルセブルツク、ハンデルダツク爰にて余等を迎ふホルセブルツクは曾て十二三年本邦に公使を勤

めりハンデルタツクは領事を勤め皆接待を命せられり八字三十分ハークに着しホテルホーレに泊す

(籠頭) 今日御國狀到來

留守狀杉孫七郎其外數通到來正月五日の日附也

山田河北

ムールデーキニマス川を渡る此橋歐洲第一の長橋也

同廿五日 曇又雨十二字外務卿 面に會し四字王宮に至る四馬の車三六馬の車一を以迎ふ面謁おわり五字過歸寓道路の兩傍に土人群集せり夜外務卿の宅に至る來客凡二百人十字歸寓飯田吉來訪伊藤福井も亦來話

青木周大倉屋書狀到來

同廿六日 雨九字過より瀛車にてロツトルダムに至り造船處を一見し四字頃歸寓夜散步せり

英往復の流車にて中食を認む

同廿七日 曇又雨諸省宮内を廻勤せり三字過よりミンユーム王の別宮を
巡視し五字過歸寓

今日李辨理公使蘭の日本元公使伊太利より歸り來訪夜市街を散歩す
芳山と正二郎平原富田等へ一書を出す

同廿八日 晴ホフマン曾て本邦へ雇入し人なりの案内にてレーテンに至りミシユーム
を一見す一は本邦の品具多し一は鳥獸虫一はエジプト、ギリキー、ローマ
の古物なりエジプトの土中より出せしものに紀元前千六百年エジプト此ミシユーム
トの土中より掘出せしスタチュエーに紀元前四百年のもの此ミシユーム
ム皆學校に屬す千、百年間伊斯波爾亞多く此地方を侵奪スレーテン孤
守水をひき敵を防ぎ終に此地を保てし也此時除税と學校の二件を土人
に問ひ終に土人の望によりて學校を興し至于今と云五字歸寓夜英公使
の宅に至る

三月朔日 晴又雨朝湯浴に至る一字よりフリンズ、ハンヲランヤ太子王第
ハンデレツキ王叔フレデリツキの宅に至り面會せり王叔は已に七十有
餘歳也夜英公使の宅へスハレーの招あり河北青木池田寛へ書狀を出せ
り

同二日 雨十字前よりアムステルダムに至り此地の王宮を一見す一年の
宮に十日滞
在すと云其よりアルチミジユームに至り畫額を見アムステル、ホテルに
て食事を認めホルクスフレーに音楽を聴又此處の畫額を見る是はヲ、
スタラリーの博覽に出すものなりと云其よりジャマントコンペニーに
至り切磨するを見る三十六馬力の器械を用ゆ歐洲中にて稀なるものと
せり歐洲諸國名玉の形あり歸途ハンデルタツクの家に至り晩食を認同
客十八人十字過歸寓

同三日 晴 の誘引にてデルフーニホリテクニセスクールに至る
ブレシデンド の案内にて校中を巡視し諸學課の順序等聞

得し然る後、の宅にて酒果を取り一字歸寓、余を遇する甚懇切なり今日杉浦同行飯田吉も在此學校夜外務卿の宅にて饗應あり同食二十一人

同四日 晴十字過よりポードインを訪ふ彼本邦に在留せしとき余の病を診察し大に其驗を得たり余五年前ポードインと一夕相話す其時平生西洋の文字を用ひ我國語を綴り文法を構成し後來少幼をして於學校學ばしめば他日歐米の書を讀むにも亦其益不少且諸課の學問上にも其便利必大ならんことを課す彼以て大に此説を是とり然して當時世人信するもの甚稀少至今日世上此説を陳するものも不少世情の變遷又以可思見ポードイン此日七年前の事を談し談又及于此本邦の人却て如此之事甚鮮し夜ホーセブルツク之招に至り歸途(以下欠)

同五日 晴九字より栗本久米とアムステルダム、の堀割を一見の爲めに至れり長さ二十五キロメートル之内眞の陸地六キロメートルと

云幅六十メートル水底の幅二十七メートル水深七メートル入費二十七
ミルリヲンギユルテンと云千八百六十五年より起せしと云七十二年に
て成就の積りなりと雖も中途爲金に故障あり業をやめ歳月を送り終今
五年にして全成就に至ると云實和蘭第一の大土工なり四字歸寓五字よ
りフリンス、フレデレツキの別莊に招請あり尤清閑の居なりフレデリッ
キ當年七十七歳曾てヲートルローに出陣し那翁と交戈せり此人歐洲フ
リンス中にて徳望も亦高今宵余に當時の事を談し生來歐洲の變遷不可
數を語る十一字歸寓

(籠頭) 西岡の便りにブルツク寫眞と書籍を送れり

本邦の書狀到來野村素杉山耕其他留守狀家書數通

同六日 曇西岡久米鈴木栗本等とアムステルダムに至り禽獸園を一見す
未米歐にて見ざるもの多々又ミシユーム等あり本邦の物も亦不少四字
歸寓夜王弟ヘン德里ツキの招に至る歸途ポードインの處に至り余獨り

先歸寓又散步せり

(籠頭)
宇宮内省

同七日 晴八字出寓元公使及ひタツク等と蘭國境迄送り來宇よりコロネル、ライトコロネルリユーテナント、ロイテルソンコンソルキニール等國境にて余等を迎へ其よりエツシンへ五字半に達す直にコツキクロツプの製鐵場中の一屋に案内せりクツロツプは五十年前纔兩三人を以業を起し今日日に使役する所の職人其外二萬人と云歐洲第一の大場也製鐵場中の鐵路英の十マイルに過く
昨日安川英より來り今朝英にて調らべしところの書類を携來れり

(籠頭)
昨夜療痔痛今日却又發痛旅行中の第一苦なり

同八日 晴八字半より製鐵場を巡視すハマー

ケ所實に

其廣大可驚四字クロツプの宅に至り晩食し七字過歸寓無間出立しステーションに至るクロツプの宅其壯大(以下欠)

(籠頭)
長さ一丈八百馬力五十トンのハマーあり歐洲第一と云

大砲の尤大なるものは口径十二インチ着發八百斤或千斤

長さ二十フヒイト重さ三十トン値は三萬二千ドル獨逸金にて四萬五千ダラー也

同九日 晴七字ベルリンに達す鮫島辨務使^{過日佛よ}來る青木品川其外留學生數十人ステーションに來る直にグラントホテルへ案内し八十三番の室に泊す佐藤池田萩原其他數十人來訪二字後品川と公使館に至り又パークへ車行して五字前歸室

同十日 晴來客不絶十字頃米國プロヘツソルシーリー尋來る彼は昨年余米國に滞在せしとき添書を乞ひ則文部省大木に一書を認む彼本邦に遊ひ大に懇偶に預りしを謝す彼は姪彦太郎居留の地にて此妻も亦彦太郎等をせわせしと云依て彦太郎へ一書を託し又時計一を託す此時計は御一新前より艱難の隙始終幾度歎死生の間に不離我實に我一功臣也十二

字より三人の案内にて禽獸園に至るまた未見の種類も不少晩食後近方の鳥魚蛇を畜せし處に又案内せり

北白川宮御出英のアレキサンドル來訪與青木談話至二字

同十一日 曇又雨一字至王宮ビスマルクに面會し謁見の節ビスマルク而已待せり終て又皇后に面謁す二字過歸寓車馬の美麗未各國にて不見なり三字頃より諸卿各國公使等へ廻勤せり夜ライト其外の案内にて劇場に至る十字前歸寓三浦池田 來話

同十二日 曇今日母公の正忌日也遙拜し且存生の時思起せり實に去今二十六年又不久之心地せり十二字よりライト之案内にてアルテシロスに至り宮内の模様を一見せり一間に會て三世ナポレオンサンクルーにて字と戦争の布告を認し机あり其上のランプに字王 ステーションにてセルマン合邦へまた其節布告せし書此下に認しと云其間の四方に戦争中に王へ人民より見舞に送し書類其外貯置けり一字又一之大席

にて今日開院の式あり王出席人民の名代其外文武の官員滿于堂王族并にビスマルク始行政官員左右に列し王權に登演舌あり其始と終に人民其他揚聲相祝す左右の樓上に各國公使其外人民の見物するもの充滿す余等は右傍の樓にあり二字前歸寓

今夜王宮へ案内あり同食するもの王族其外文武官員百二十人モルタケも此中に在り王太子兩皇后とも待遇其丁寧なり王宮へ至る已前太子の居に至り太子皇后へ謁せり

此夜大學校書生數千人燒火市街を連行し太子の宮に至る太子過日不快にして頃日快氣都府に歸りしを祝すと云

同十三日 晴(以下三行欠)

夜馬芝居の案内に至る米歐にて未如此の妙を不覺

日々來訪の人不少青木品川談至于三字終に相泊す

同十四日 飛雪如銀十字より電機製造所字國中の第一なりこゝに至り諸

器を一見し其より大病院に至り又一の病院に至る是は皇后大に扶助せりと云に二字歸寓三字前より大博物館に至るスタチユー其外ローマ、ギリキ、エシプトの古物多し此中にライオン川より出し數千年の銅像或は地中より掘出せし數千年前のスタチユーあり又畫閣も甚大なり盡く一見し五字前歸寓夜來客又多し九字過桂太郎と散歩す

同十五日 曇十字過より陶器製造所に至る政府の所持にし一字過歸寓二字過より畫或はスタチユー等の一閣に至る四字前歸寓五字前より國相ビスマルクの請招に至る彼の誘引にて彼の右側に列し同食す新話も亦不少同席凡四十人餘食後彼の談に獨逸國におゐて他の事を求めるにあらず雖然我堺界を侵すものあるときは不得止不得不守堺界東洋諸國と交るとも公平を主とし彼の不欲を強て求むるの意なく英佛等の東洋に屬地を領し威力を張て往來するは獨逸の志にあらず故に於獨逸は日本とも長く親睦を眞に盡さんことを欲し且才能の士の如きに至りても望むものあらは周旋して其人を撰らび其望に満たんことを欲すと余一言彼に

答ふ則我日本の人民も元より獨逸の人民も毫も異なるものなし恨むるところは只數百年國を鎖し自ら宇内の形勢に暗くまた四方の學問を研窮するの暇なし依て交通の際遺憾とするものまた不少希望するところ精力して速に地位の進むを祈る而已云々八字過歸寓田中と又散歩せり昨夜飯田へ一書を出せり

同十六日 曇武庫に至る佛より獲るもの不少其中モンハリヤンの砲臺にて分どりせし大砲尤大なりまた於當國七百年六百年代に用ひし大砲あり去今三百五十年頃の舊砲あり是は多く石彈を撃ちしものなり其より又モンビシユー城に至る歴代の車類即位の衣服其他古器物日本支那の陶器畫類等あり二字過歸寓青木とレケーションに至る其よりまた鮫島と白川宮の御寓に至る今日は宮御誕生日にて使節其外書生數十人請招日本料理の御饗應あり九字過歸寓山田市芳山五へ書狀を出す昨日井上世外杉猿村の書狀留守狀等達せり皆正月十九日頃の仕出なり

(籠頭)
日曜

同十七日 晴四字頃まで室居其より青木の案内にて彼の寓に至り夜一字過歸寓

同十八日 曇八字より の屯兵所に至り一中隊の調練を見る其整齊實に可感陣屋を盡く一見し其より又 の騎兵屯所に至り調練を見厩等を又一見し歸途テリグラフィ局に至る結構甚大なり戯にベルシヤの に當日の天氣を尋ぬ忽ち其報あり十二字歸寓三字よりミントに至る佛の價金を鑄造するもの甚多し四字歸寓夜近傍を散歩す飯田吉書狀到來増野橋本の_{左内弟} 來訪

同十九日 曇昨夜入江文郎來着過日余より傳信を達す依て彼當國に來れり夜桂太郎と散歩し又レケシーションに至る青木外出鮫島と談話十字過歸寓桂十二字まで談せり今朝英より安川議生書翰達せり
(籠頭)
今日余に歸 朝云々の御用狀に達せり

留守狀杉孫七郎小野勝三郎等の書狀達す

同廿日 雪大使より歸 朝云々に付談あり於余此一條昨五月頃より序あり實に其趣意不能了解(以下四行欠)

夜青木と品川の居に至り書籍を調べ四字歸寓

同廿一日 曇三字より獄屋に至り一見す他國と異なるものは只罪人互に其顔を不能知のため聽聞所等も各の場所甚嚴なり且獄中を往來するときもハットの前に鼻上まで黒き木綿の一片を垂れ眼穴を開けり五字歸寓夜池田三浦等來訪七字頃より青木と又品川の寓に至り如昨夜四字歸寓英より芳山手狀達せり

同廿二日 曇來客如山二字後品川と市街を散歩しまた品川の寓に至り四字半歸寓當日は孝王の誕生日にて滿街揚旗幟人行も尤繁案内によりて八字半より王宮に至る侯伯會するもの凡六百宮中にて奏樂劇戲を催せり一字過歸寓

同廿三日 晴來客不絶伊藤静間桂光田とパークへ車行し無間歸寓夜與青木品川に會す

芳山五平原太正二郎へ一書を出す又山田へも出せり

同廿四日 晴與品川と十二字後市中を散歩す四字歸寓五字諸省宮内且海

陸軍の人を招く來客十餘人余モルツケと席を連ね同食す

余等歸 朝一條に付屢難論あり爲其甚迷惑せり青木等周旋せり

(籠頭) 山田の書狀達せり

同廿五日 晴十二字入江文郎と青木の處に至る今夜入江佛へ歸れり八字

頃より到品川の寓四字歸寓今日西岡の書狀到來

同廿六日 晴大久保與余歸朝一條に付過日已來議屢變換終に到三四度爲其今朝來甚不愉快漸到于晚一決大久保先發余は至魯國其より歐洲中順路經歷歸朝に決せり當國內務卿の招にて六字より彼の宅に至る夜散歩せり

(籠頭) ガラーフツライレンボルヒ

同廿七日 晴十一字よりホツタムに至る一千七百七十年の頃フレデレツ

キ第一世の築きし宮殿に至る中堂具等寶石を以柱壁を裝飾せり間數二

百の中四十を經觀せり南庭にスタチュー四百餘あり

(籠頭) フレデリツキの椅子あり彼常に犬を愛し愛犬椅子をかみし跡其のま

ゝあり

同廿八日 晴十二字過ヒスマルク其外兩三家へ爲告別尋問し無間歸寓今

日本邦書生等來訪するもの不絶十字過出寓魯國に向け發せり今日日本邦

へ便りあり留守河瀬山尾井上三浦五郎渡邊昇榎村半九郎等へ書狀を出

せり英國寺嶋辨務使へ一書を出す

(籠頭) 魯國に至るステーションはヲ、ストハンホーフと云

同廿九日 晴七字半デールションにて朝食を認む十一字四分一コンネグ

スブルグにて三十ミニユート停車中食を認めアイトクスに至る三

持兵隊三處凡二十人に警衛するを見るまた戸毎に兵卒兩人左右に直立せり舞樂の間は縦百步餘其他廣大の間不少控へ席にて茶菓酒又菓物の汁等を出せり一字過王に謁す外務卿ゴルチャツコクと宮内卿と其側に侍立せり其他此席中に七八人あり王國語にて答辭を爲す此時使節先謁し其後書記官理事官を此處へ延り然して王内宮に入使節始また外室に出す直に食堂へ案内し凡如白耳曼中食を饗す三字前歸寓夜散步せり昨夜芳山の書狀到來依て其返書を出せりまた伊藤玄伯へ一書を出す

同四日 晴ゴルチャツコク來訪亞細亞局陸軍大藏官地内務文部司法海軍諸卿英佛獨全權公使等へ廻勤し三字前歸寓外務大輔へは面會せり夜散步せり

同五日 晴十字過ウレスキの誘引にて伯德爾城に至る城中々央に寺塔あり伯德爾歷代の帝后を此中に埋葬せり當帝の父母及子孫伯父母等の棺圍に草卉の盆栽を連ね花繩をかけり其墓側の壁に父母或は近親より與

へたる耶蘇の畫像を懸け燈明釣れり中央に須彌檀あり參詣の人民これを拜せり其より造幣寮に至る金貨は金八十八に銅八銀貨は銀八十三銅三分一通用銀は銀銅相半す金はシベリヤ之アルタイ山より出る凡一年に八萬斤と云斤をソコ銀は四萬斤なり餘は歐洲中にて賣得すると云また伯德爾の製せし小形の船を見る此周圍に分捕の旗を挿めり去年伯德爾生年より二百年歳にて人民の群集夥しと云歸途伯德爾の住居せし木材の一小屋に至る間數三其一は待客の間其一は常住の間其一は寢間なり伯德爾自作の椅子其外小形の船等あり常住の間は伯德爾信仰の耶蘇畫像あり參詣の人民不絶燭火を備へまた僧に頼み回向をなせり其聲恰如僧徒の回向人民其間跪き十字の手様をなし或は合掌して拜す

待客	如僧徒の回向人民其間跪き十字の手様をなし或は合掌して拜す
寢間戸口	寢間は僧徒の控へ所とせり戸前に參詣人の入るを窺ひ錢を乞ふ
常居	ものあり其よりまた小銃の餘銅管製造所に至る其結構甚大二字

歸寓認食何及ハーンソんとまた
に至るマールブルを以建築せり此

石の種類を用ゆる其數不知幾種孔雀石、石等の柱あり此寺樓に登り當府を望めは總て一目の中にあり四字前歸寓

（龍頭）
未見如此寺

同六日 晴魯帝親兵隊の祭日にて帝始太子其外親王練兵場に至る此練兵場は長

さ百問餘幅二十間位の大屋なり八百餘人整列し中央へ甍を舖き机を出し僧侶經文を唱ふ和尚其中央に立ち僧侶凡二十人別十四五歳の童また二十餘人一種の服を着し同聲に相唱ふこれは其聲の美なるを以と云其目的に錦の短旗を三士相守護して立り經おわり和尚其前に至りまた經文を小聲に相唱へホツスの如きものにて此旗をうてり經文中節々帝王始太子其外諸官員或は外國公使もあり十字の手様をなして相拜す末後帝王其旗の處に至り拜して立つ守護人また帝王の袖へ口を着してなむ然して僧侶退散其旗を前に進め八百人の兵隊樂を奏し行列をなし練兵場中を二周し然る後整列に立帝王去て外に出群集の人民一同揚聲官員其外も皆散す余等歸寓二字前也三字より皇族ヲルデンフルフに面謁す少時談話然る後別席にて茶菓を饗す四

字歸寓夜と散歩す

（龍頭）
帝王の出る前旗は一小隊の騎兵守護して歸る

同七日 曇又雪十一字過より宮地健一郎江村二郎等と ミシユ

ムに至る鑛石鳥獸虫の形を陳列す他に見る所と凡異なるものなし子或は不具の兒マ子は双て合するものあり或は對て合するものあり或は一頭にしものあり不具の兒も種々の異なるものあり其他小異のものも少又無目のものあり無鼻のものあり別に二の奇怪なる具を見る其よりヘリミタルに至る畫閣數千別室にペートル及カスリン其他の所持せし處の器物を見る當時を想像するに器械に至りては本邦當時と雖も不及もの不少ペートル自作せしものなどあり此中にゼンマイの仕懸けにて金の孔雀翼尾を開き啄を張り舌を動しまた其下に金雞あり翼を張たゞき聲を發す其製作精妙實如生また別室に歐洲亞細亞米等の金貨古今の種類を集めり蒙古韃靼等の金銀貨あり凡五百年前のもの我甲州金と無異トルコの金銀貨の如きは與歐洲無異四字歸寓夜散歩せり

同八日 曇昨夜有微雪八字よりコールビノーに至る里我七十五位此處に政府のマニハクチュールありおもに船艦に關係するところのものを製作せり専ら水車を用ゆ四十馬力尤數車を以共力又横水車あり力なり職人千二百七十人時として三給金は小共は二十コヒーチ或は三十コヒーチより最上工は三ループルに至ると云水車を用ゆる故器械も又他に異なるものあり、の宅にて食事を認めり此前一寺に至れり此寺當所中にて第一なり金の十字へ銀の邪蘇をかけしものへ洗米を供せしを見る燭は總ての像へ備へり

佛像をかけり其中に利益ありとて人民夥多參詣すると云則其像は此寺開基の僧の像なり金の十字へ銀の邪蘇をかけしものへ洗米を供せしを見る燭は總ての像へ備へり
(燈頭) 總馬力を合すれば八百馬力にも至ると云

水は二十八フヒートの下りなり

同九日 曇又晴十二字太子の宮に至る太子夫人に面謁す終て茶酒菓を別室にて饗あり直に歸寓其より棄兒院に至る戸側の室に棄兒を請取男子へは青色の一片紙女子へは赤色の一片紙へ印し直に樓上に携へり樓上の一室にて湯浴させ量りにかけ一に青赤色の紙に印す請取ときは只宗門に入し哉否を問ふ

而四字間其處におき養育局へ遣し一乳母に附す六周日人乳を以て養育し然る後田舎へ送り人に托し牛乳を以養わしむ樓三層にして中間を通行し左右に數十の室樓下樓上にあり一室にて長婦人また其に次ものあり乳母は一室に七八人より十一二人に至る乳母の給金は衣食を除く外一月に二ループル半満五歳以上二ループル満十歳後十五歳まで一ループル半其後滿廿歳まで無給但其家にて無給業をとらさしむるなり此院中に棄兒の病院あり眼を病むものは窓を暗くし光線を遮るるを病むものは藥氣を室中へあり此兒に不慮まで牛乳を用ゆる時院中にて一割八分は死しましたは必其病増長すると云此病の兒は牛生育せる也

田舎へ遣し生長まで一割八分は死すと云六分四合で生長せり月未滿の月位のものも生長すと云尤月未滿は半位に生育せりとベッ田舎へ遣わせしものトは銅を合せて製し其間へ温湯を容れ常に暖氣をとれり

内を注意して才氣のあるものは男女とも學校に入れ學はしむ學校も此院へ附屬せり其より啞院に至るこれもまた大也他で見るところと別に異なるなし女には似合して業をおしへまた庖厨へも二人つゝ日々詰めて下婢のなすところを見ならわせり男は男に似合し業をなさしめり四

字半歸寓五字半より帝宮に至る則晩食の招なり余は中宮と對して席に着けり同食するもの百餘人給仕六十餘人食物總て佳なり八字前歸寓爾後また散歩せり

(燈頭)不入宗門ものは此院中にて宗門を受けしむと云

同日 曇十二字帝の弟ニコラス皇族の宅に至り面謁す夫人も同席なり當時陸軍の總長を務めり別室にて茶酒菓の饗あり一字過歸寓二字過より大和夫の案内にて何ハーションと湯浴樓に至る尤余等の至りし室第一なり湯浴室ともに五室あり裝飾及不淨の一室あり衣服を脱着するの一室あり浴室に風呂も備へり蒸氣にて全身を蒸すの室あり蒸氣の厚薄自在にして一種の枯芝を枕にし適意のときまで此室中の柵に臥す此趣實に妙或は使驅の夫或は芝を以て全身をうちまた汚穢を流洗す實に愉快を覺へり米歐中未如此の全備にして美なる湯浴の屋を不見三字半歸寓六字過より杉浦と西直二郎を尋ね談話至于一字歸寓後又與青木談す四字就眠

同十一日 雪木梨信一の書翰山口縣より達せり池田寛治の書翰巴里より

達せり御用も亦到來す大久保も使節一統え巴里より一書を投せり終日家居夜江村と散歩せり

同十二日 晴寒氣徹骨八字よりラブスコルプ社中の製鐵所に至る職人千二百給金一日に付一ループルより半ループルを與え日曜日を除く外晝夜交代をなし無間斷製造せり鐵はサイベリヤ、ウラル山よりとると云職人は總て魯人なり年々大砲は四十挺ならしに製作す尤野戰砲の如きは不知其數ヲ一スタラリヤを博覽へ出す大砲重さ四十二トン口徑十二インチを已に運輸するを見る英製と違ひ全くはかねにて製造せり小銃も製造するの局あり亞米利加發明の當國の兵隊總て用此銃製造所にて用ゆるところのハマーベルダン銃なりは五十トンなりハマーの下を七十ヒート掘り材木及ひ石を埋め尙百五十トンの鐵板を三段に埋めこむと云此製造にて案内をせし仁は曾てフーチャーチンと下田へ來りしものなり歸り懸け同氏の宅にて中食を認む二字過歸寓五字半よりコロチャツコク之宅に至る則同氏の招なり同

食するもの三十餘人八字歸寓

(徹頭)
プロツクナリ

西來話

同十三日 晴昨夜來水瀉にて終日平臥今日御用狀達せり廣澤へ亂暴に及びし賊わかりしよし大使へ條公より申來りし趣を聞けり已に三年に至り此確證を不得余等不安ものあり天網實に不可疑

山田市之允福井順道富永冬樹從蘭より到着三條公子書翰到來夜山田青木等と三字頃まで集話

同十四日 曇十一字ホテルを發しブハルシヤフスカヤラグブラロエステーションにて乗車し三字廿八分ルカにて食事を認め六字過ブスコフにて茶を取れり

同十五日 晴七字

十字過ニユーメン河を渡り

二字ニイルツボローへ着す此處にて食事を認めアイデクウンへ至

る此間ゴミニユート則獨の國堺なり魯車を下り字車に乗かへれり三字過キヨニシスベルヒに至る此處獨逸第二の砲隊あり魯より獨領に入る農民の貧富土地の肥瘠一目判然たり夜二字にて一行の連に

別れ余等何ハルソン外直にベルリン、ライストバアン、ホーフステーションに鮫島青木

へ達す其よりローヤル、ホテルに至り、番の室に泊

二字後品川とレケーションへ至る光田其外來訪するものも不少ハーク中を散歩せり

同十七日 晴九字頃野村靖之助内海精一和蘭より到着余昨日當地へ着せし故品川より傳信おくり二氏速に至れりと熊谷平三郎の案内にてグナイゼナウストターセ少ミジユームに至る蠟細工にて四美人佛領亞弗利加兵卒の爲彈撃たおれし有様を作製せしを見る此中二つの美人と兵卒は呼吸するの模様恰如生歸途一店の庭中にて食事を認め二字過歸宿

同十八日 晴九字池田謙齋の誘引にてドクトル、プランゲンベルヒ之寓に

至る于時病客充滿依てブランゲンベルヒ明後廿日を約し余の寓に至ると歸途レゲーシヨンに至り文部御雇教師の事を青木と談じ青木直に
の處に至れり過日來關係三字頃より青木の誘引にてシャロットン
ブルヒに至り當帝父母の埋骨場に至る土地幽靜にして棺槨を安置せし
ところの屋尤清潔をきわめ棺槨上に父母の横臥せしマーブルの像あり
一はローマンの作一其工精妙其よりボルセンドルフを訪ひ凡二字間談話
六字過歸寓

(繼頭) 此處はシャロットンと云し女主の告營にて曾て一世ナボレラン此中に
一泊すと云

同十九日 曇今日サクソアルテンベルグの婚姻にて其儀式甚盛なりブリ
ンセスマリヤは八馬の車に乗り其前十餘の貴族六馬四馬にて列行し五
六隊の騎兵前後を警衛し に至れり市門を過しとき 發の
祝砲を發す路傍の左右見物の人民如山冑を取り禮をなし或は花を贈る

ものありプリンセスも車中より相應して禮をなす宮中の式も甚盛にし
て來客千餘人と云

同廿日 十一字過トクトルブランケンベルヒ來訪佐藤 池田に託
せられ來て通辯し治療に及べり痛み隨分烈しく出血せり且左の藥劑を
認めて歸れり(以下二三行欠)

同廿一日 晴十字ブランゲンベルヒ來訪昨日の痛にて明日を約し歸れり
佐藤池田も來訪山田と往事を談し將來を語り時刻の移るを不知

同廿二日 晴十字ブランケンベルヒ來訪治療せり十一字何パーソンと出
て兵隊の行列を見また然る後パーク中を散歩して歸れり過日婚姻の事あり今日の訓練は
その爲めならん歟帝太子皇后
其他皇族等皆其場に趣けり來客不絶三字後山田に至り佛の兵制兵部省等
の事を取調へり

(繼頭) 歸途山田と散歩し山田一店へ誘引し晩食を認

同廿三日 晴ブランケンベルヒ來訪三字より青木の案内にてプロペンル、

グナリストを訪ふ其談中益を得る不少英之 を訪ふ 暫時談話せり
歸途また北白川宮の御旅寓へ伺候せり于時御不在にて此家の主人夫婦
と暫相語る其より青木の寓に至り品川等と同食し然る後世談移時慨歎
不少十一字過歸寓

(籠頭)
青木送り來る

同廿四日 晴ブランケンベルヒ來訪治療せり芳山戸田平原及び正二郎へ
一書を出せり二字後散步五字過より青木の寓に至り(以下五六行欠)

同廿五日 晴桂山田とグラントホテル之湯浴に至る三字池田佐藤莊原ブ
ルクス等を招き同食す五字過より山田野村内海等増野の寓に至り日本
料理を認む品川など周旋せり十字過歸寓

今夕何書記の妻不幸の到來あり實に残念なり

同廿六日 晴十一字ホテルを出てステーションに至りトレフテンへ向け
發せり五字ドレステン之ビクトリヤホテル三十六番の室に泊す山田と

同宿なり野村内海古間^て富永皆同行青木品川池田等其外十餘人送りて今
朝ステーションに來れり夜市中を散歩す

同廿八日 曇八字ホテルを出モルノルヒツテイ之鑛山に至る此處の鑛山
學校も歐洲中にて尤有名なるものにして諸國の書生の多く此校に來れ
り種々ホンフ之雛形并鑛石等を見其より鑛洞を概見し深さ英また鑄解
所に至る鑛夫六百一人一日に一人二英瑞西等の書生案内せり四字半歸寓山
田野村内海古間富永パーソン等同行此日の途中風光甚佳梨花桃花路傍
に滿開せり五字過よりブルツクス之招きにてコンマンデル、ハン、ホンケ
ルと同食す七字過ステーションに至り埃國へ向け發車せり

(籠籠)
下

此處にて微雪降る寒氣刺骨

同廿七日 晴何パーソン山田と市中よりパークに車行せり此パークの風
光實に佳府外に桃李に埋し數村落を見遣り本邦の春色など思ひ出せり

十二字過歸寓四字頃より同行の諸子ハートンなどと府中を散歩し二の長橋ありまた小ハークありこゝに至り河流を望み或はミシユームに至る此ミシユームは歐洲中にて有名なるものなり六字過歸寓コンマンデル、ハン、フランケル夫妻來訪妻はブルツクスブルツクスの近親にて其妹はアタランチツクを同船せり

(艦頭) 上

同廿九日 晴十字過奥國都府ウインナへ着す岡本大藏大丞小松書記中井中議官等ステーションに來り迎ふ其よりホテル、コールデン、ラウンに至り三十七八番の室に泊す佐野辨務使渡邊書記生外來客不絶四字頃より市中博覽場王宮内等へ車行し其より公使館に至り晩食を認め十一字過歸寓

(艦頭)

正二郎の書狀到來使節より談判書寫到來せり

四月三十日 曇寒氣刺骨時々微雪を見る十一字蒸湯に至る小松野村内海

同行なり其より岡本大丞の寓を訪ひ三字過歸寓夜公使官に至る當國の日本公使 イ、イ、イ 太利日本公使等と同食す十字過歸寓

五月一日 曇微雨今日博覽場開場日なりシイホルトの弟迎に來れり依て小松山田などと同車行して場に至る路傍の看客車馬連續不絶圓堂中樓上樓下共の周圍に當日の式を見るもの充満せり十二字當帝皇后英太子孛太子并后其他王族場中に入り來る此時祝砲を發し人民皆揚聲登壇上祝辭を演説す(一行空)

周圍中へ區別をなし各國ミニストルなども皆此中にあり此式終りて各國より出すところの品物を一見す余山田と二字過歸寓夜公使官に至る長井と舊事を談し且本邦の近況等を聞不覺三字

同二日 晴十一字過より岡本長井中牟田等と市中を車行し有名の寺院等を一見しましたミシユーム等に至り三字過歸寓七字過より戲場に至る當

都の劇場界中の第一等にして四字寒暖の度を同しくせりと云
今夕伊藤よりテリカラフ達しハンビルグを達し今夜フランクホルトに
至ると云

同三日 晴十字より小松の案内にて山田豹とシユインブローンの王宮に
至る此處府外にして宮庭の景色遠濶なり傍に禽獸園あり一字頃王宮前
の一店にて食事を認め山田は公使官に至る余等ホスピタルに至るべ
ルンクラウー誘引して古武器及び武庫製造所等を見せしむ 古器中に
甲冑あり
總體藏金にして歐洲中にて有名なる品と云 銃彈を受けし彈底の皮衣あり又
日本の大砲二あり其一は慶長十五季銃前 と云銘あり彈二百目他の一挺は只ル
印と而四字歸寓

今朝内海野村長井等 向け發せり山田富永四字過佛へ向け發
せり

夜曲馬を見る字ベルリンにて見るところのものなり尤種々の新趣向あ
り其中八馬曲馬手の指揮に應し行止曲折自在をなす是等尤妙末段に印

度人獅子五頭を鐵籠中へ容れ自ら此中に入り鞭を以或は撃ち或は拂ふ
獅子皆發怒聲縱横に飛走す實に見るものをして寒心せしむ十字歸寓又
レケーションに至る

(籠頭)
アシユードダント

二百目の砲は本込にして其形二百餘前の物に(以下欠)

同四日 雨今朝佐野公使内談に預り遇見を陳述す其所以は此博覽會へ種
々の雜物を持來れり未本邦の人博覽の主意とミシユームの主意を分別
する不能故に莫大の金費を不厭東洋の未盡精微之雜品を如山陳列せん
とす是等却て國の品位を他へ蔑視せしむるに似たり尙諸藝研究の爲め
纔五六月を期し六七十人の人員を連れ來りたとへ容易の業といへど
も數月にして無學のもの決して不能了得必せり其上ウエナ之物貨他國
に四五倍す依て斷然無用の人を歸 朝せしむるに不如と論せり然るに
政府に現地の情實によりて金貨は送致すへきとの内意あり故に六七十

の人員も強て欲令學其藝の意あり余亦是を取捨するの權なし雖然只政府の馳形其實を後にし然し其費我民力に關係するを不思なり

二字頃より博覽場に至り各國の列品其他新築の家屋等を一見す未物品ことごとく不備といへども其盛可驚千八百六十年巴里に催せしとき三四倍すと云七字頃歸寓夜澁澤喜作 岡本大藏大丞など來話

同五日 晴六字出宿佐野公使渡邊書記小松書記送てステーションに至る伊太利公使も一行中の蒸車にて歸國せり七字發車府外十餘里の郊にて砲隊の調練するを看過す其人數々百

(龍頭) 狛

同六日 晴六字過ベニシュに着しステーションより直に小舟にてビクトリヤホテルに至る室百三十二番なり此地は元一小嶋にて鐵道を築さりしときは舟にて往來せしと云市街狹隘一挺の馬車を不用市街の後方縦横に水路あり車にかゆるに小舟を用ゆ恰如我浪華米歐中市街村區到る

處無不見馬車宿于此地轢聲始て絶耳中井弘野村靖内海精等先着于爰中山領事三輪書記亦在留于爰食後何バーソンと外出し中山三輪等來訪するに逢ふ其よりサンマルク寺也を一見す寺中の飾裝皆モサイクにして其美可驚紀元八百二十二年より建築ハレドードにまた至る此中議事院裁判所獄屋等あり其飾裝も亦美なり寺中或は此處の飾物トルコ或はキリキの舊物等不少皆曾て戰爭の後持來りしものと云此處畫額等第一ナボレヲン巴里へ取歸りし其後舊圖を寫し當其處しものあり又再ひ取返せしものあり此面前三方の商店あり其軒下を往來す全佛巴里の如バレーローヤ、、、も必此形様を寫せしものならん歟當時議院の各國にあるものも其形全類之カラス等當地の產物にて髮の如くに延へ種々細工等をなす余亦一見せり其より山中のホテルに至る内海野村皆宿于此一字アルセナルに至る 誘引し士官また局中を案内せり古武器或は共和時代の品物不少當時もちいしところの船形或は現物の

一片等を見る大砲も二百年前のものあり如見ウイナ此處海軍局に屬し造艦場あり水雷火等を製せり伊太利海岸へ二千餘を備ゆと云ふ點火の手續き等をなし見せしむ其他海軍に屬するものは多くこゝにて製せり王此地に來りしとき常用するところの舟等あり則馬車にかゆるものなり軍艦を平生運用船に用ゆるものあり當時別に木造の軍艦を製造しおれり是より此市府に屬する書庫に至る此間小舟にて海灣を往來す風光甚佳數十萬の書冊あり古きものは千餘年のものと云此中に曾て日本より來りし使節の書と云ものあり曾て大友使節をローマに送ると云必此者歟伊斯巴爾亞の文字にして姓名國字を用ゆ

此書庫はサンアトニョーと云寺の傍にあり五字前歸寓夜サンマルクの前に至る月明如晝都人群集亦或は奏樂野村等の宿に至り十一字歸宿同七日 晴七字宿を出ステーションに至る野村内海來送る彼等は今十字よりマルセールへ向け發せり中山三輪中井余等と七字半發車九字バト

ハーへ停車す此處は人口六萬此處ローマより四百年古き寺あり其堂中の一閣歐洲稀なる廣きものと云則イタリ中外にミジエームありまた大學校もイタリ一中第一にて生徒二千人ありと當月此處競馬あり其舉甚盛にして諸方より群集せりと競馬に出る人皆ローマの服を用へりと云總て今日の途中麥圃菜園皆如本邦然し耕耨の方法尤類す或はまた多く桑樹を種へ其間へ葡萄をつくり桑樹と桑樹へ其蔓をひき其間八九尺或は丈餘もありボロヂャーにて中食を認此處よりフロレンスまで多くは山中の鐵路にて風色も亦佳洞中四十七を通過す長きものは英二里餘合して英の十五里餘と云ヘニスよりフロレンスまでの鐵路四億萬フランクを費し造りしと云六字過フロレンスに着ホテルヨローロッパの(以下欠)
(籠頭)前田幸庵
里數

前田今朝より佛へ歸れり

同八日 晴八字十五分に發す途中アウガストルの城跡を見る其城山上に在り大橋を山上へ横へ恰如虹地名ナニ山下を廻る河名をニラと云六字過ローマに至るホテルローマの八十番の室に泊す夜諸子と散步す

(籠頭) 與中井話し到四字

同九日 曇有雷十一字過出宿タイベル河ローマの古跡にを渡りカツソルサントアンゼローを見セントヘートルに至る世界第一の大寺にて其造築の美工と世界第一と云天井の畫中に一婦人ペンを持しものあり其ペン凡一フットに不見然し其實六フットありと云高大推して可知其よりパントヨンに至る圓堂なり紀元百年の造營にて其後六百年を過ぎ寺になせしと云議事堂のあとを見る千八百年前のものなり地中よりほり出せしホリムを見る此傍に寺跡等あり今尙掘て不歇ホリム凱旋門なりローマ帝國時代より數度の變動にて屋宇も亦幾度歟沒滅し甚しき廿六フットも埋しと云シーザーの宮殿跡此近傍に地中より半出の寺跡またロモ

リユースを祭りし寺ローマの別開祖の一大寺跡あり皆ヤツ已前の寺跡なり此處にまたチーチユースの建し門ありコンスタンチーの建し門ありコンスタンチーはチーチユース後三百年此人始てヤツを信せし人なり其よりコルシムを見る長さ五百八十フット横四百六十四フット内部長さ二百七十八横百七十七數段にして高處を望めば如山崖十餘萬人を容ると云猛獸或は罪人等をいれし處の跡ありセバステンの建し門ありテンブルベストを祭りし處あり清淨其より數里外近來セシタルを掘出せし處あり則其地に至る地下數丈の下にセシタルあり數千人を葬りし處あり棺槨等マールブルへ人物等調刻せしあり其巧なる可驚其より歸りてアンヘテヤートルに至る此處はローマ時代人民の集會するところなり此外にパークあり其中を車中にて往來しまた高園に上りローマ中を一望し四字過歸寓夜與諸氏散步す

(籠頭) コルシムは紀元三十年前より建造し二代にして成就すと云

外輪四重なり

今夜與中井本邦の事を話し至于二字

同十日 晴九字出宿ローマ時代のホントマシヨラ門大を見其よりホープの居に至り畫額其外古代の器物等を見家屋の壯大實に可見則セントヘートルに隣せりまた其よりノマタナ橋に至り一見すコンスタンチン、ヤソを奉争せり此橋もコンスタンチンの築きしものと云 此近傍に舊代の水道あり地中に二字歸寓三字よりミシユームに至るセントペートルの傍なり米歐中にて見るところのフタチユー等多くは此中のものを模せしものなり皆ホープに屬す歸途畫樓書林等に至る十一字前出宿十一字半發車中井中山三輪ステーションへ送り來る○使節明朝ローマに着すと云中井へ托し一書を伊藤に寄す(籠頭)エジプトの古物また如山古代のモザイク或は八疊餘の石體等あり

同十一日 雨朝六字半ナーフルに着しホテルドルフルに至る室は六十九番なり十字過よりナシヨナル、ミシユームに至るボンヘー等の品物を區別して陳列すホンペーは紀元前百年にして則千九百年前なり當時の

畫壁古陶器古銅器古金具スタチュー古銅器スタチューの中に奇なる品あり交合の形又は陰莖等を露はし又は大陰莖等あり 黒紙に文字の見ゆるものあり卷たるものは凝て如石炭其始土人皆石炭様のものと思ひしところこれをほとけば文字露るまたガラス器あり其品如青貝皆ボンペーより掘出せしものにして青貝ガラスの如きはキリシヤにて當時開けしものと云モザイク或は種々のスタチュー赤黒の土を以て造るあり別にエジプト等の古物あり一字歸寓二字よりカツソルモンテーに登りナーフルを望す風光無比四字過ホテルへ歸りまたハーソンと宿前のハークを散歩す種々の花草を見る

(籠頭) 當時も尙ほどきしものあり

古代のモザイクあり

同十二日 晴十字後より市街を散歩し寫真多くは則壁畫なり 及ひ珊瑚珠店にて種々の珊瑚珠細工をもとめり此地には尤珊瑚の細工多く歐洲各國または米國等へも出せり二字歸寓食後 に至る此間一洞

中を通過せり長二千二百四十四フット幅二十二尺、
高二十五フットより六十九フットまで、
ニーロの堀通せしものとも云また其より古しとも云此途中にも古跡あり或はローマ時代の家屋
とて海潮中にあるを見る床邊まで潮をなげり馬車の左右へ老少幾多裸足にて來て
錢を乞ふもの不絶其有様甚見苦しく漁村の形様等本邦に似たるもの不
少歸途別路をとる路傍にイルシユルの墓あり古の詩人なり六字過歸寓中井傳
信の應返あり今夜ローマを發すと云

同十三日 晴七字中井大倉屋到着せり八字半蒸氣車にてホンヘーに至る
里數雖不遠此間費時を一字古ホンヘーの府に入しところに門あり則是
堀出せし處にして古代のまゝなり門車の通行するところと其左に人の
通行するところと相分てり門の右側にミシユームを建てボンヘーの人
其のまゝ化して如石になりしもの或は當時種々の器物などを陳列せ
り街道は皆凡方一二尺三四尺の石を敷き多くは車を運送せしものと被
察車輪のあと其石に痕せり左右は人々の通行せしところと見へ凡當今

歐洲各國市街の形様と不異只當時とこなるものは右側より左側左側よ
り々々へ中道を渡るために道の廣狹により或は一石或は二三石を高く
敷しものあり本邦の庭に用ゆる大概家屋狭小八疊十疊又は十二三疊位偶大なるものも
其間にあり皆練瓦石又は方石雜石等にて築造せり間々マーブル石其他
同質の石を用ゆるところあり柱等も亦然り其形當時のものと同質ニ
スーを察りし處あり其像はナールミシユームにあり
クリミナル裁判所あり此内に牢獄あり當時歐洲各國にあるところの裁
判所と大略相同

議院あり左右に時々の議長のスタチュエを陳列するところあり中央に
スピーチを演高壇あり方八九尺高三尺餘
ジュプタルの宮あり
メルキユールの宮あり
賣買會所ありありあり此内に賣買神の像ありと今ナールブルのミシユーム
にあり其模像を此會所に立てり

アボンタンスと云街にてマーブルにて造る飯水管を見る其他飲水管不
少本邦の井戸の如く石にて方四尺位の形をなし其側上に飲水の管突
出せり管の端は石にて種々の形あり此時は常に井戸へ管口より水を吐出せしものと思
まれり

一豪富の家跡を見る數十の寢臺ありまた室中に一の飲水管あり食堂等
あり

酒屋あり街ことに多く其跡残り主人の姓名等誌せしものあり或は傍
の藏如き處へ六箇八箇酒瓶を列せし處あり其圖如此



または店に小瓶を列へ置し處あり其臺は本邦の如し

大小劇場のあとあり圓形にして凡歐洲各國今時あるもの、如し數段皆
石造男女見物所をわかてりと云

兵隊屯所あり是又如當時あるもの、如し

一酒店四五日前に掘出しものを見る

一寺あり凡如今時製

一豪家の跡に其主人の像あるを見る店口此文字をマーフルへ刻せり

一屋中に小井戸あるを見る

青樓あり小室相列す床甚狭小然して土にて築きなせり室口ごとに春畫
の如きものを畫けり或はまた他の青樓に陰莖の形ち石にて、み戸口の
壁に附着するあり

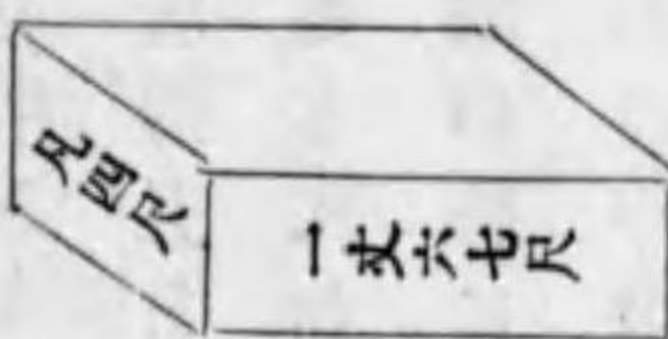
水を吐出するものあり皆モザイク製にて甚美麗なり今朝歐洲中模此形
もの不少

街中に下水あり

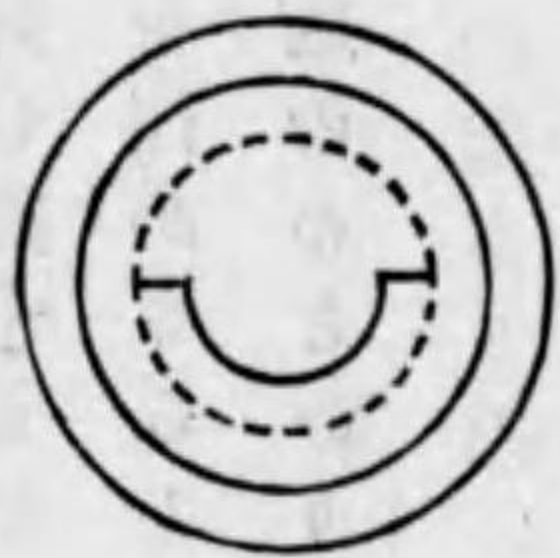
四辻の如き處あり此處の一方に門のあとあり此門尤大なり此上にもと馬上の像ありと云

一湯屋あり凡八間に四間位の室三あり大理石或はモザイク等にて製造し美なりと云へし

一室は大理石にて如此のものあり是に熱湯を溢し其蒸氣にて蒸せしものと云



凡四間圓位の室中に如此ものあり是は水浴所と見へ水を出せし管あり脱衣の處あり棚の如ものあり



水浴後火をたき暖むるところありたき火の臺などあり一室は壁二重にして其間へ蒸氣をいれあたゝめしものと見へ其あと残り是等尤可驚ものなりフライベイトハウスにして當時コンシユルを勤めし人の宅と云あり結構尤大なり如此家は多く家屋の中央に小庭ありカマドのあとあり甚類本邦の製雪隠等あり其形今時不見ものなり
パンをひさきし家とてパンを焼きしところありひさき春今尙残りて四箇あり其形如此

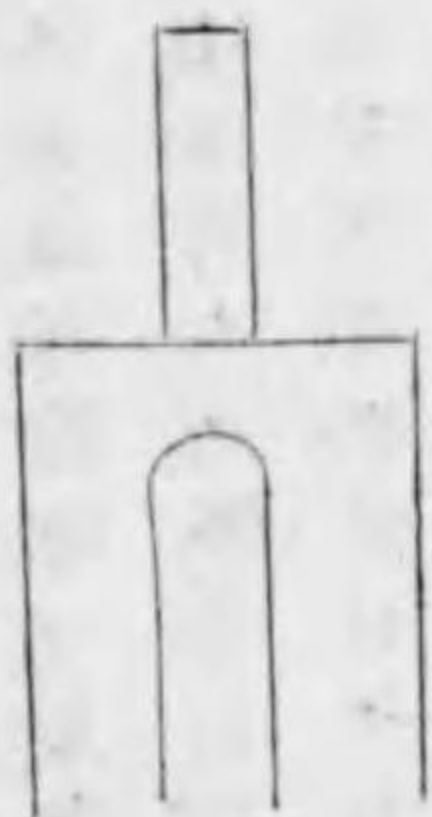




歴史家のサルリスと云人の宅あり甚大なり壁面の畫等今尙存せり
郭外の堺に一大門あり其傍に兵卒の番所等あり此處より一兵卒の骨出
ると云

此外にマミヤーと云人の墓あり其外スタチユー或は墓所等あり其墓形
今時も亦似たるものあり火葬せしもの、骨を納めし處あり皆此類は一
家々々之ものと云製甚巧也

郭門外に數十人を容るゝ番所の如きものありこれは曉ボンヘーに着し
未門を開かざる時は此處にて門を開くを待しものと云
大旅店のあとあり



一豪富の別荘あとあり三階の家屋は只此家のみと云多くは平屋或は二
階而已なり地下に方四十間位の廊下あり酒なども此中へ貯へり此處に
て死骸十七出ると云此上は三階なり
また下水等のあとあり

周圍に瓦壁のあとあり則郭内外の堺と見へり
此處に此節兵隊の屯所あり見物人を一々案内せり然して彼等は一錢を
むさほる能はず此處の寫眞をひさきその勞を償ふと云ボンペーの古跡
を離れ纔二三丁の處にステーションあり古跡の下に小ホテルあり或は
當所の細工もの等ひさきし店あり
二字前ナーブルのホテルに歸る食事を認めまた中井大倉等と珊瑚店寫

眞店に至る

夜諸子と談話

(龍頭) 山縣狂介河北義二郎山口範藏伊藤俊介田中健等の書状を得る

同十四日 晴十一字頃一店に至り與諸子寫眞せり三字後市街を散歩せり

九字出ホテル到ステーション十字發車

(龍頭) 此朝宿前のパークを散歩す

同十五日 晴六字半ローマに着す伊藤俊田中健ステーションに來る纒に

本邦の近況を聞得せり十字發車六字半フロレンスへ着しホテルニュー
ヨルに泊す室は十七番なり

同十六日 晴十一字よりハーソン中井大倉屋池田等と市街を車行しシユ
ーモンと云有名の一大寺に至る外面は皆マーブルの白黒二石を以裝飾
し或はモサイク等のところあり堂中の長さ殆六十間六百年前の建築に
してローマのサントペートルよりは凡百年古しと云方樓の尤高きもの

あり是亦白黒のマーブルになり其に隣してバツチストレーあり洗禮所
シチーホールを一見し其傍に書庫ミシユーム等あり群集シチーホールにて小民
前甚騒しまた千四百四十年に建し一大屋あり當時フライベートとハウスに
ハナリして如此の大屋稀なりと云長
さ六尺市のハークに至る樹も亦大なるものあり縁陰尤佳二字前歸寓モ
ザイク店に至りまたマーブルにてスタチュー等のマニハクチュールに
至る四字歸寓夜近傍を散歩せり
當地は尤有名なる地にて伊太利國中千三百年間より五百年間まで共和
なりルータ

當時歐洲中にて第一の都府になせりと云

同十七日 七字出ホテル伊太利國の古府は皆外壁あり

今日の途中本邦に間々あるところの平地上より高きを見るクラトローも
礫川を帯ひまた外壁あり十二字過ボログナにて中食を認む四字過ロジ
ーに小憩す此處は則第一那波列翁の古戰場にて有名の地なり其他小憩
所は

敷所 あり 五字二十分ミランホテルドラベルに着す室は二十六番なり此處の
 ステーションにて澁澤喜作野口等マに會せり
 同十八日 雨又晴十一字前より與諸子外行當地道路尤美ガルハルヂー門
 と云を見るハークの光景甚佳ローマのホルシカを模せしものあり三萬
 人を容ると云此前に訓練場あり其正面にマーフルの大門ありて其美未
 見もの第一那翁の名を刻せり千八百七年より千八百五十九年に至り成
 就すと云一方に第三那翁と第二イクトリヤエはニユールの名を刻せり
 直線の一大道これよりスイツツへ達せり第一那翁曾てアルプを越し伊
 太利亞を討撃せし後此大道を造りしと云到于今經此大道も無不驚愕那
 翁の豪膽も亦可思見此處の陣屋は古城跡なり其よりサントマリヤマを
 古寺、一見しましたアンブレシ古寺千餘年前の建築なりに至る此時法談中にて聽
 者數百寺の半に満てりジュークの古宮殿古跡ローマとて市中に石柱十
 六市中に連立するを見る此中間に一古寺あり元の宮殿と云一字過ドノモト寺に至る全マ

トフル石にて恰如雪山塔上に登る壇數四百九十餘市街眼下にあり外表
 に四千餘の神像を飾れり大なるものは六七尺と見ゆ其美麗歐洲第一と
 云五百年前よりの建築にして第一那翁の助力にて終に成就すと云歸途
 大雨三字歸寓夜散步せり
 此地は第三那翁へ尤人望あり那翁死去の日五萬圓の金忽集募彼のスタ
 チューを建ると云

同十九日 晴又雨十字過より澁澤野村の案内にて諸子とコモに至るミラ
 ンより廿八里と云チーンメルスコンメルの誘引にてカペレー
 ターの養蠶所種本邦の用カスラモノビレーの製糸所皆器械にて糸を製せり女
 恰似本邦の機チリアニーはゾラの織物場に至ると二様あり此地の風光甚佳青
 山圍江水當國の人避暑に來るもの不少と云カペレーターの處より江山
 を一望する實に其景色難譬遙にモンバリヤンの頂を望め白雪如玉此地
 に千年餘の古寺あり市街に近き山上に古城の跡あり前後ホテルアルタ

十一に休憩し六字歸宿有雨有雷

同廿日 晴十字より馬車にて

に至る此寺歴史に著し

き鐵冠あり 六角にして精金と見え外飾は玉石を 如此固着せり一片を綴て六角と なす則其綴るものは耶蘇十字の刑を受けしとき手足を貫釘せし釘と云

埃佛其他諸王爲其經幾多戰爭人民の血をそゝざしこと不可數此冠を着

けしもの四十六王と云第一那翁尤其後なり一字過歸寓六字過出宿發此

地澁澤野口等送り來る十一字サルチニヤのキューリースにて轉車 伊則當

(以下欠) 十二字過則有名なるモノハリヤン之洞中を經過す洞中の左右皆

方石にて堅固に組立たり其間に人を容るゝ處あり小屋あり連々ガスを

照す三字過モダンにて轉車し

○廿一日 又コロランにて轉車し十二字前スイツのセニールバに着車すス

ラーションにて不圖華族鍋島の一建に逢ふ食後市中を散歩すホテルの

名はトラビーと云室は四十番なりホテルの前江水横流對青山風色コモ

ンの右に出づ

五字大山來話十一字過歸去往時を語り今時を話し且喜且歎す

芳山平原と正二郎とへ一書を出す○太田徳三郎傳信を送れり

(籠頭) 卽位の時用し種々の珍器等あり

同廿二日 曇十二字市街を散歩今日 の祭日にて皆日中より戸

を鎖せり一字歸寓鍋島華族來訪中井巴里に至る大山も同行なり三字ス

ラーションに至り送る鍋島一建も同時伊太利亞に發す歸途太田の來尋

するに逢ふ一應歸寓直に同車カランサコネーと云處に至る山水を眺望

す其より又江を渡りハークに至り五字半歸宿認晩食與太田メツチャコ

フの家を訪 メツチャコフは曾てガルバルチーと共に伊太利亞にて戰爭をなし一足な 失せり大山彼を師とし佛を學へり不圖今夕ステーションにて面會し相約

す談話十字過に至る依て辭去歸途太田と一茶店にて暫時小憩相語

(籠頭) 伊藤田中山口杉浦に一書を出す

皇居失火の傳聞あり依て鮫島へ傳信を以相尋當月五日炎天せし報あ

りと答

同廿三日 晴又曇八字外出十字歸寓メツチャコフ來訪太田と共に散歩し終に江中の小洲に至る樹下に小憩し當國の近況などを相語る十二字過歸寓二字より太田の誘引にてシヤムスフハジを訪ふ此人は七十有餘にて當國一二の有名名家なりセニバをレホルムせしは實に同人の力と云日本の形勢等彼の傳承せし處を以忠告せり且歐洲の狀態等相談す三字半歸寓六字前ホテルを發す七字コサンに達す其よりウセーに至りベウリハヂーホテルに泊す室は八十六番なり大田を送りロサンに至り市中を徘徊して歸る支度の僧某當國へ留學するものに逢ふ

同廿四日 晴食前八字ホテルの庭前を散歩し青山江面に聳へモンバリ山頭白雪如山瑞西國中の一勝景なり食後大田の誘引にて當カントンの罪人を職業せしむる處に至る一部に室を別ち或は杳或は織物不器械或は木細工或は籠類用川柳等を作らしめり其より市街を車行しモンブランに停車し江山を一望す此處は皆土人の遊地なり寫眞等を求め十二字

前歸寓小野の二小童を尋ねしとき二小童とも學校に至り家にあらず此家の妻婦人に會見す後刻二童ホテルに來る英の書生、同伴せり 相共にステーションに至る二童とも纔英佛を解す余等二十年前の事を回顧し實に可言奇別大田等十二字五十分發車四字ベロン停車此處は瑞西の都府なり人口三萬六千人一河流の傍にて二中隊の訓練するを見る總て近傍路上の風光甚佳なり九字半パールにて晩食を認む此ステーション未見の長梁なり一字ストラスボルグに至りホテルパリスに泊す室は七十六番なり

同廿五日 晴八字前ホテルを出郭内外を見分せり總てストラスボルグは壘中に市せりライン河を堺とし字佛相對す郭外ライン河に瀛車通路の鐵橋と舟橋と二を梁せり鐵橋も中央を界とし左右の橋口へ兩國帝の號を元とするせりと云字兵此橋の上下を渡りまた正面よりも烈敷砲撃に及ひ終に大兵を以ストラスボルグの四面を圍み當時の戰爭尤此處劇烈

と云此地の砲臺は尤嚴整にして佛のチーバンなる人の築し市外へ入るところ
 の諸口爲彈丸摧破し家屋等も倒潰或は焼失せしもの不少幸國へ對する
 ところライン橋の正面尤甚此處の壘外へは則ラインの水をひけり鎮臺
 も在此處戰爭の時終に自殺せりと云市街中尤可見ものはストラスボル
 グカーシタルなり寺塔ツタ稍の高き歐洲第一と云土人の風俗漸異なり女子
 のかすきもの等に至り尤いちぢるし一大屋あり烟草のマニハクチユー
 ルなり是は元佛にて烟草の商賣は幸兵當時一萬五千土壘も遂に修覆せり學
 校等も亦大なるものあり二字前當地を發車す停車するところの市村兵
 卒の充満するを見る五字過マインスに達しホテルドアングレタールに
 泊す室は四十四番なり當地は千八百七十六年に埃と戦しとき幸に合す
 此處もまたストラスボルグの如く市街の外皆城郭佛と戦しとき此地シユ
 ツクナツサヲの所領にして七十六年後城郭は皆幸兵の守るところなり
 青木周品川彌瑞西のセニバに來り廿三日余を尋ぬホテルの約齟齬し終

に不得會于此跡を追ひこゝに來る一遺墟相同宿す夜二字に市街を散歩
 し歸て又談すライン河を挟み城郭あり汽車の鐵橋と船橋とライ

(籠頭)メツツも此人の築きしものなり

同廿六日 晴十字品川青木とまた市中を散歩し十一字發此地ビスバー
 デンに至る温泉あり總て歐洲の人來り遊ふの地なりホテルア、テレル
 に泊す室は八十三番なり此處に一のハークあり老樹蒼々其間に花樹紅
 黄白雜色池水滿溢其に對し中央に一大屋あり曾て遊客來集一大博覽場
 を開くと云其表は左右に佛のバレーローヤの如き長梁あり百種の器物
 を陳列す其間に二池あり吐水散霧碧樹如洗市街も亦雖小清潔なり市中
 に又温泉の沸出するところあり六字より六字まで遊客來于此飲温泉散
 歩す雨中にても無妨如青木品川と此ハークを散歩し新島四去太來訪於米
 國分袖彼は田中文部大丞と渡歐 品川新島と兩度ハーク其他を散歩せり一度
 同伴せり

同廿七日 曇又雨又晴終日不定八字出宿ビーフリヒに至り蒸氣船に乗る
船名ウリヤマ、エンベ 新島來送る此途中にて宇兵の一大隊轉陣するを見る
ロ、ア、ンド、キン、グ 兵卒吹烟或同聲謠吟稍本邦に似たるものあり昨夜は野宿 九字過發船ライ
ン兩岸の光景を看過し一字過コブレンスへ達しホテルドベルに泊す室
は七番なりコロネルライト當地の陣營にあり青木品川等と尋問し過日
の一禮を述ふ同人誘引して第一の砲臺に登り諸壘の形勢を一見すライ
ン河横流斜にメツツより出る河と相合し實に一要衝の地と云へ此砲
臺も又廣大を窮めり於砲臺 四字半歸宿八字よりライトの招にて彼の居
に至れり共に晩食とり相談す妻小男小女皆陪席十字歸宿

同廿八日 曇十一字發車一字過コホレンスに達しホテルノードに至百七
十二番の室に憩ふ青木品川と市中を散歩し に至る
千二百四十八年建築を起し未成就に至らず漸千八百六十三年寺内へ人
を入るを許せしと云ライン河へ横し一大橋あり蒸氣車通行と人行と分

てり別にまた船橋ありマイン、ス、コ、プ 八字青木品川に別るステーション 十字
余等發車せり

同廿九日 曇六字過佛地シューモンに小憩す此處にて人別荷物等を改め
り十一字巴里に達しホテルシブラルタルに至る河内宗一來訪中井弘も
同宿なり三字後鮫島を訪ひ夜劇場へ同行す

西(以下六行欠)

同三十日 曇米人齒醫 の處に至る

同三十一日 曇齒醫に至り歸途兼松とハレーローヤを散歩し四字歸寓又
散歩せり夜檜崎入江文を訪ふ不在九字歸寓檜崎其他數客來訪芳山戸田
來訪今夕英國より渡海せりと云今折柄不在なり正二郎も同伴せり河野
龜之進工部の用事にて龍動に來り諸氏と共に來て余を訪へり宗五郎公
も御同伴と云

(籠頭) 平六公増野毛利來訪

六月朔日 曇又雨十字毛利藤内と齒醫に至り其よりロートビロンに至り
芳山などを訪ふ戸田河野及正二郎にも面會せり共に 烏諸犬を見る殆^{種々}千近し四字ホテルに歸る村田新八檜崎河内西園寺柏村
等來訪河野の本邦の近況を聞得せり
留守狀春八十衛及英國在留の河北富田豊原平原山縣等の書狀を落手せ
り寺嶋の書狀も落手す
同二日 曇又雨毛利と齒醫に至る入江其他數客來訪夜又河内三刀谷戸田
芳山河野檜崎等來訪夜中井檜崎と散步正二郎來泊
同三日 曇又雨毛利及正二郎と齒醫に至り二字歸寓又正二郎とロートビ
ロンに至る戸田芳山の誘引にて一食店に至り同食相語終に十一字半に
至る十二字前歸寓寺嶋書狀落手佐野の書狀もまた到達せり今夕レゲ
ションに至る

同四日 晴雨不定三時後晴十一字頃より正二郎と散歩す二字後中井とま
た散歩せり今晚鮫島の招にてレケーションにて晩食せり寺島も來會森
中井も皆同食す十一字歸寓歸途サンシリセーを過光清朗夜色尤佳
青木品川の書面相達品川ストラスホルグの圖面を送れり

同五日 晴雨不定鈴木 來訪十字より入江の寓に至り古賀某とボヂ、
ツスヒロソヒー家の 寓に至る社中 も相會せり此社
中於龍動使節の書面を出せしと云其議論公平にして又爲本邦に可考件
々不少史生の懶儒歟又はパークス等^{彼にはパークス等に疑惑あり}使節へ不達歟余も其
尋に預り不能詳其元因則今日 其主意を陳述せり歸途入江の
寓に至り二字歸寓二氏の書面は入江譯して原書と共に後飛脚船便を以
送ることを約置けり

二字過より寺島の寓に至り閑談數字近來於本邦政令不得其當の十件を
舉げ歎息相語る實に近來形皮に而已相馳せ政實に眞善あるを不聞一報

を得ることに無不長歎息億兆の支配に關するもの眠食も亦不安必竟根本の確乎たる規矩なくして名利の士官員に充滿するの故歟於今日顧思せざるときは何日歟億兆其幸福を得を得む哉

五字過歸寓芳山戸田河野檜崎柏村増野其他來客甚多し

同六日 晴七字過リランに達すホテル

に至り相憩ふ平六公ハ

一ソソ余と池田なり何は昨夜先してマルセーユに至る八字頃

來訪 昨夜戸田レケーションに至り傳信を達せり依て來尋 食後平公ハ一ソソ余等坂田の案内にて織物

所兩所に至る職人の宅にて織るものあり或は三五人の職人を宅へ集め織るものあり職人處々に分在し便宜によりて職をなせしと云中頃大に器械を興し職を集め織出せしよしなれども利益却て不當費依てまた器械を廢し當時の如くなすと云リランは尤織物の産物世界に名あり英米其他へ輸出するものも實に又大なり器械を廢し人工を用ゆる等眞に只經驗上より出るところなり上品のものは一メートル 内紋柄等の手 其次の

品は凡一メートル其次は凡一メートル餘と一日織るところのものも差あり職人も五フランク四フランク三フランク順々尙此下等もありと云余見るところ上品のもの一メートル凡八十フランクの價と云糸より絹に至るまで順序あり商工等も亦順序あり第一に糸商人あり第二に織物製造人 織物に付此もの其元に糸商人より糸を買得し第三の製造現職に渡す現職中凡六あり其一よりかけ其六中多くは貯蓄あるもの少し職人 其一染屋 貯蓄あり終に現職にて順序を経絹となし織物製造人へ返し其四に絹商人へ織物製造人より賣與へり 織物製造人中にピロド、紋柄もの、其よりフルビ 形もの等各共而已な一派になせり 一エルに登る市中に上 織物製造人 あり一望全府を見るに足る此府の地位甚便なり瑞西セニバの湖水流てこゝに下り他の一河と相合す此河に二十餘艘の小蒸氣船あり五ミニュートを間さめ河中を往來し河岸にステーションあり一人十ペンスと云二字宿に歸る松江の人小田 織物製造人 來訪三字コフントクトルに至り直にまた平公小田坂田とミシユームに至る ルの内にあ

リ織物を主とし諸國の織物日本支那印度其他西洋各國凡五百年前のものより近時新造のものに至る凡四百年頃指織にて尤精工のものありまた古來の變遷を示すの爲の雛形而已を陳列するところあり紋柄を織るに至りては千四百年代イタリーより移せしと云イタリーにて凡千年代支那より移し千百年代紋柄を織しと云尤拙にして當時不及支那萬々數度相變し十餘變と雖も其間一マに四百年代は二人六百年代は三人別に側より繩をひくも當時用るのありまた器にてそれなほぶきまた器械を廢し種々工夫を盡せしものなり此器と云は一般ジャカールニ器械と云は千八百四年にジャカール此器械を發明し免許得しと云へり陶器の一場も其中にあり支那日本品もあり尤古し一樓下ると側に商法裁判所あり裁判の有様を一見せり其よりハ中にて一樓下ると側に商法裁判所あり裁判の有様を一見せり其よりハ一クに至る此間に博覽會場に至る一種の蒸汽車あり自然の河水此側を流れ風趣可愛六字宿に歸り食後散步諸子橋上に至り暫時河流を望む無間歸宿九字半過ステーションに至り十字四十分發車此時不圖森に會せり一昨日一惡漢實母義父義妹の三人を當正月暗殺せしもの、裁判あり死

刑に處し罪科は斷頭場にて申渡すと云證故の詮議尤綿密にして惡漢逃辭を以てすると雖も切迫に不叫叱して穩に服罪せねはならぬところに至れりと云東洋人は等は注目すへきところなり

(籠頭)初の四つは近在にて働くもの多しと云

風色亦佳

同七日 晴七字前マルセルに達しグランドホテルデマルセルに泊す室は四五番なりウエナより伊藤の傳信相達す青木の書翰傳信も亦相達す寺嶋芳山戸田青木鈴木中井姪彦太郎及正二郎等への書狀を認む三字過より市中を散歩し種々の品を買得せり六字歸寓また市中より海岸等一見の爲め平公及池田と車行し九字ホテルの戸に下車しました市街を散歩せり十一字歸宿中井へ則吟の一長歌を寄す「涼車暮破巴城烟單衣曉達梨水邊千里行程一夢裏足跡已既三洲偏憶曾自出東武都風雲屈指又三年天子詔命尙在耳耻我痴情有誰憐百慮煎盡國無益千辛空勞民難安輕步落

日心身懶鐵石橋頭夏尙寒碧流碎月々影亂瀾波纒収月依然此中感慨人知
少獨指東天立風前

同八日 晴八字出宿乘車海岸に至る飛脚船フーグリーに乗る同行は森有
禮藤原、松本、黒田、後藤、横山、余等一行五人毛利公何池田ハートン
外に森同行の米人(此五字ペン書)十二人なり十字過揚碇

同九日 晴經度八分緯度四十一度五十六分三百八里の行程十二字

同日 晴 字伊太利亞ナールへ着す百四十里の海路六字前揚陸市街
を車行舊ホテルにて茶菓を認め寫眞屋等に至り十字前歸艦經度十一度
五十八分三十分緯度四十度三十四分十六里十二字

(龍頭)當地にて濫澤の書狀を得る

ホルチサイドまで千九十四里

同十一日 曇波濤甚不穩船客臥床のもの多し經四十一度四十二分緯三十
七度二十二分行程二百二十一里十二字

ホチサイドへ八百三十三里

(龍頭)夜十一字右側に島の火山を見る火勢甚盛三字メシーナの海峡を過

同十二日 晴波濤未全穩余亦昨日來多くは時を床上に費せり經十八度四
十七分緯三十五度五十四分行程二百十七里十二字

ホチサイドへ六百十六里

同十三日 晴海波漸穩なり經二十三度五十六分三十七分緯三十三度四十分
十五ア行程三百里風尤順十二字

ホルトサイドへ三百十六里

同十四日 晴海上甚穩經二十九度三分四十五ア緯三十一度三十九分行程
二百六十一里十二字

ホルトサイドへ五十五里

四字前ホルトサイドへ着泊せり晩食後揚陸市街を散步す官吏或は士官
等は歐洲の衣服を用ゆ兵卒は漸異なり我立つけの如きものを着す土人

も亦これを着するもの多し官吏士官皆マゴメツト宗の赤胃アツを用ゆ間々
歐洲の人住居しまた其人種と覺ゆるものも不少土人甚邪鄙にして多く
は裸足黑人土人アフリカの一種の黑人支度人種等雜居せり宗旨はマゴメツト、キリツキ、キリ
シス、等ありと云市中に一の小パークあり花樹花草を栽せり

軍艦一艘碇泊す着泊のとき祝砲アツ發を發せり

同十五日 晴二字ホルトサイトを發す此處云ゆる亞細亞と亞アツ利加の堺
にて佛人の造るところの大カナルの口なり此間八十七里道中にて暫時
船の同じ洲上に觸し英
觸しものを見る此間に一のレーキありスエズに至る五里前へ泊すカナ
ル中なり

同十六日 晴四字揚碇スエツに至る土人寫真其他種々の土物を携來てひ
さぐもの如ホルトサイド九字半スエズを發す經三十度二十九分緯度二
十九度十八分行程四十三里
エデンまで千二百六十五里紅海中の平波恰如席上

同十七日 晴經度三十三度十四分十五分緯度廿五度十四分行程二百八十
六里
エデンまで九百九十九里暑八十六度

同十八日 晴經三十九度四十四分三十分緯廿度五十三分三十分行程二百
七十四里

同十九日 晴經三十八度三十七分三十分緯度十六度四十九分三十分行程
二百九十四里
同廿日 晴經四十一度三十分緯十二度四十三分行程三百六里

エテンへ百五里暑九十六度
九字前エテンの近傍へ碇泊し火號を以水先まち待曉エデンに入る
同廿一日 晴曉より土人船傍に來集喧嘩甚譁船客の錢を水中に投するを
窺ひ穿水其錢をとる百其一を不誤容貌實如猿二字後上陸土人の店に至
る沓をもとむ其より平六公子同行藤原横山等と市中に至る